

42382

教科書文庫

4
8/0
42-1938
200030 1500

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

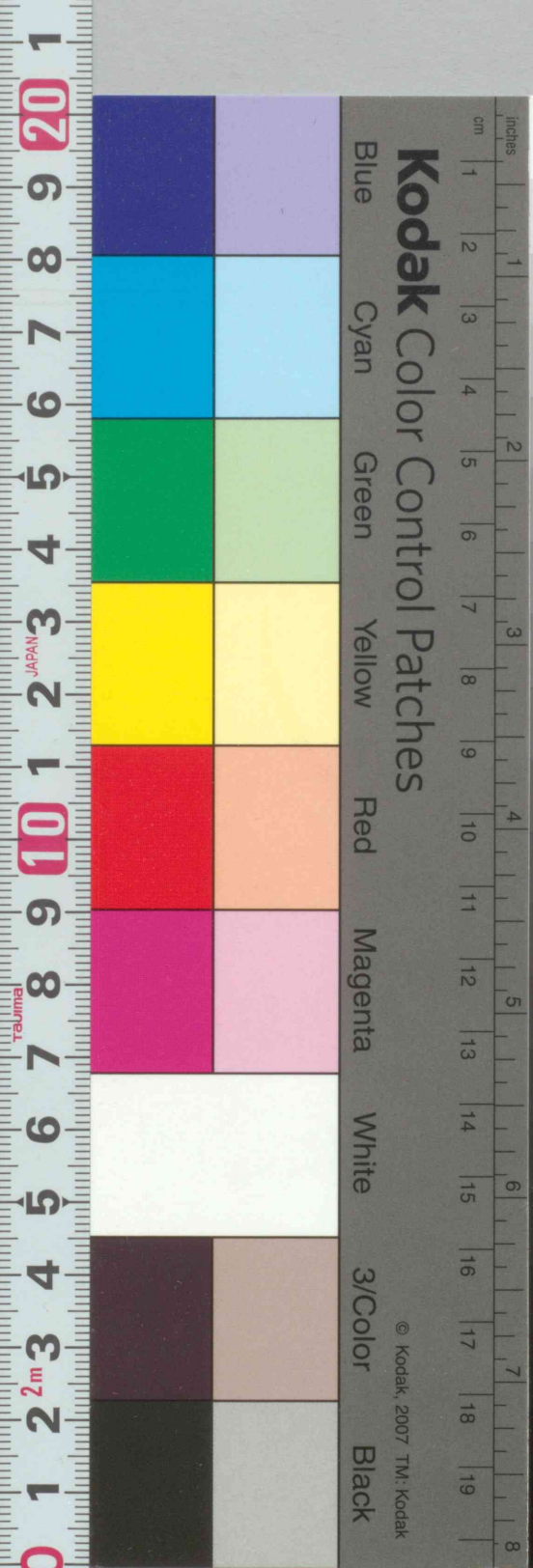


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
17a7
資料室

女子新國文

新改制版

卷一



3259
Ha7

資料室

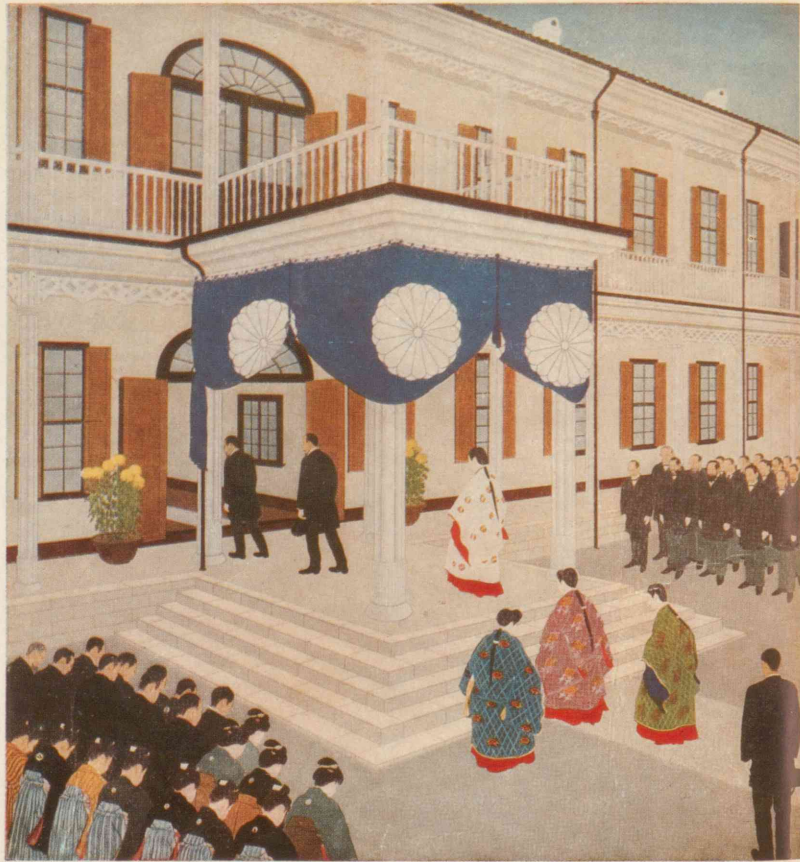
教育部省檢定
昭和三十二年一月十七日
高等女子學校、實踐學校國語科用

文學博士 芳賀矢一編
東京帝國大學教授
文學博士 橋本進吉訂補

女子新國文

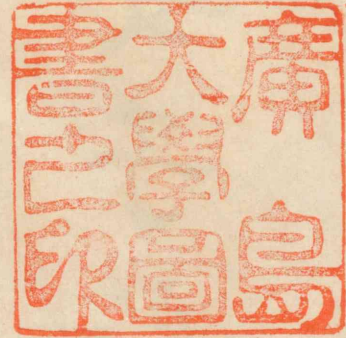
改制
新版

東京會社
富山房發行



筆月弦澤矢

啓行範師子女后太皇憲昭



女子新國文 改制新版 卷一

目次

一 櫻	二
二 今上陛下の御幼時	石井國次 五
三 峠の茶屋	夏目漱石 一四
四 犬ころ	二葉亭四迷 三
五 青葉(詩)	宮崎丈二 三〇
六 明治神宮に詣でて(書翰文)	三
産土神と氏神(自修文)	四

目次

七 しあはせ(寓話).....島崎藤村...三〇

八 莓.....五十嵐 力...三〇

九 童心.....北原白秋...三〇

一〇 母 親.....島村民藏...三六

一一 母を頌ふ(詩).....西條八十...三六

一二 白い國朝鮮その一.....中村亮平...三七

一三 白い國朝鮮その二.....中村亮平...三六

 古代に於ける日鮮の關係(自修文).....萩野由之...三六

一四 夕 立.....徳富健次郎...三六

一五 高原を想ふ.....黒田初子...三九

一六 ベートーベンの話その一.....牛山 充...一〇八

一七 ベートーベンの話その二.....牛山 充...一五

一八 交 際.....安井哲子...二三

一九 風 鈴(童謡).....川路柳虹...二七

 一 風 鈴.....川路柳虹...二七

 二 夜明け鳥.....野口雨情...二六

 三 所その一.....沼田頼輔...二九

 四 紋 所その二.....沼田頼輔...三七

 五 家.....沼田頼輔...三九

 六 我が國の家庭(自修文).....徳富蘇峯...四七

 七 五箇條御誓文.....徳富蘇峯...五三

 八 鳴く蟲の話.....一五七

三 美しき國民性……………一五

附録

常用漢字表

昭憲皇太后御詠

金剛石

金剛石も	みがかずば
珠のひかりは	そはざらん
人もまなびて	のちにこそ
まことの徳は	あらはるれ
時計のはりの	たえまなく
めぐるがごとく	時のまの
日かげをしみて	はげみなば
いかなるわざか	ならざらん

女子新國文 改訂新版 卷一

一 櫻

櫻の咲くのは春の末である。春の日本は水蒸氣が多い。どんよりと曇つて、寒くもなく暑くもない日、和を花曇と言つて、夜は照りもせず曇りもせぬ朧月夜。雲霞と紛ふ花には最もふさはしい景色である。そよよと面を吹くや春風、春の特色はどこまでもものんびりとした心持にあつて、きりつめたやうな激しさ、厳しさの少しもないところにある。櫻はちやうどこの時の氣候にはぐくまれて咲出る花である。際立つた特色のないところが即ちその特色である。賀茂眞淵はうらくとどけき春の心より

照りもせず云々
「照りもせず曇りもはてぬ春の夜のおぼろ月夜にしくものぞなき」(新古今集、大江千里)
面を吹くや春風
ちやうど(丁度)

賀茂眞淵
江戸時代中期の國學者。明和六年(二四二九年)歿、年七十三。



ひさかたの云々
平安時代初期の歌人紀友則の作。
ひさかたの

思ひ浮べられる

あしききの云々
奈良時代の歌人山部赤人の作と傳へられてゐる。
あしききの
暇あれや



櫻の野上

にほひ出でたる山ざくら花

といつた。春の日は永い。

ひさかたの光のどけき

春の日にしづ心なく

はなの散るらん

櫻は永陽の日に最もふさはしい花である。こゝに大宮人のゆつたりとした優美な様子なども思ひ浮べられる。

あしききの大宮人は暇あれや

さくらかざして今日もくらしつ

たそがれ(黄昏)
さながら(宛)

よしの山云々
明治時代の歌人八
田知紀の作

牛車の歩み遅く、花見て歸るたそがれの景、さながらの繪
卷物である。

よしの山かすみの奥はしらねども
見ゆるかぎりは

さくらなりけり

これは満山櫻の雲

に包まれた吉野山の

風景を詠んだのであ

る。

はなのくも鐘は上野か淺草か

これは大都會の櫻の花におほはれた光景である。櫻は牡

はなのくも云々
江戸時代中期の俳
人松尾芭蕉の作
おほはれた



(筆舟樵島加) 狩櫻の人宮大

ばら(薔薇)

すべて(總、凡)

丹やばらのやうに花瓣を愛賞する花ではなくして、木とし
て愛賞する花である。否、多くの木を集めて、人はたゞ花の中
にあつて愛賞する花である。下に見て愛賞する花ではなく
して、上に眺めて愛賞する花である。春風四月、日本人はすべ
て花の中の人となるのである。

二 今上陛下の御幼時

石井國次

今上陛下の御令徳多くおはす中にも、第一に驚き奉るの
は御記憶の拔群にあらせられる事であります。學習院で今
まで多くの生徒に接してまゐりましたが、陛下のやうに御
記憶の強い方は、お見受け申した事がありません。蟲の名で

二 今上陛下の御幼時

石井國次
教育家。學習院教
授。明治七年茨城
縣に生れた。今上
陛下御在學當時は
初等科主事として
親しく御指導申し
上げた。
御令徳多くおはす
拔群にあらせられ
る
接してまゐりまし
た

お覚えになつた

も、貝の名でも、聯絡も系統もない事まで、一度お覚えになつた以上は、決してお忘れになるといふ事はありません。

この御記憶の拔群な上に、御研究心が非常にお強く、何でもよい加減にして置く事がお嫌ひで、詳細に御質問になり、また御自分で徹底的に御研究になるのであります。例へば、歴史で聖徳太子の事を申し上げますと、お歸りになつてから参考書をお調べになり、聖徳太子の憲法とはどんなものか、三寶とはどういふ事かと御研究になる。理科で蝶のお話を申し上げますと、蝶類圖説をお調べになつたり、盛んに御採集になつたりして、日本産の蝶は勿論、外國産のものまでも御觀察になる。或は電氣のお話を申し上げますれば、種々な器械を

お嫌ひで

聖徳太子

御名は厩戸皇子。第三十一代用明天皇の第一皇子。推古天皇の外孫。推古天皇二十九年(西暦六〇一年)四月十九日薨御。年四十九。

御實驗あそばされ

御趣味も豊富にい
らせられ

かういふ風で

お取寄せになつて御實驗あそばされ、無線電信や電話の事まで、すっかり御理解になるといふ風であります。旅行、登山の御趣味も豊富にいらせられ、單なる御運動としての外に、地圖や案内記をよくお調べになり、其所の産物や、動物、礦物から氣象の事まで熱心に御研究になる。萬事がかういふ風であらせられるから、御知識が確實で、且深みのあらせられる事は、實に驚歎し奉る外はありません。

明治神宮に參拜して、明治天皇の日常御使用になつた御調度品を拜觀した者は、誰でもその御質素なのに感泣しな

明治神宮

東京都渋谷區代々木にあり。代々木公園にあり。明治天皇と昭憲皇太后の御遺傳のせむか御感化のせむか

お用ひあそばされ

くらゐ

むだ(無駄)

知らしめたら

多からう

れですから御學用品なども、全く一般學生と同様なのを
用ひあそばされ、鉛筆などは、當時一錢五厘の鷲印のを好ん
でお使ひになり、しかもそれが非常に短くなるまで、決して
お捨てになりません。消ゴムも當時四五錢くらゐなのを、豆
粒程になるまで御使用になり、御帳面でも、半紙や畫用紙で
も、決してむだにはあそばしませんでした。
それで大正三年三月、陛下が初等科を御卒業あらせられ
ました時、陛下のこの御高德を一般兒童に知らせめたら、さ
ぞ國民教育に裨益するところが多からうと考へて、陛下の
御使用になつた背囊、教科書、雜誌、筆入から、帳面、鉛筆、ゴム、そ
の他陛下が御製作になつた手工品、圖畫、標本などを拜借し

拜觀せしめる

説明をいたし

京橋、日本橋
東京市京橋區。同
日本橋區。

……さへ
かやうに

りつば(立派)

出来ないでせう

て一室に陳列し、御教室や御控室などすべてを公開して、一
週間、市内及び近縣の小學兒童に拜觀せしめた事がありま
す。

その時、毎日何千といふ兒童が、校長や教員につれられて
参り、私どもは手分をしていろく説明をいたしたのであ
ります。確か、京橋か日本橋あたりの學校の生徒と思ひます
が、女の子でかなり綺麗な服装をして、幅の廣いリボンなど
を著けた來た一組がありました。私はその女生徒たちに説
明をしてから、皆さんは殿下さへかやうに御質素であらせ
られる事を拜見したら、もうりつばな著物や、幅の廣いリボ
ンなどを、家庭でおねだりする事が出来ないでせうね」と言

…なさる

つたら、感激して、大分泣いた生徒がありました。陛下はまた非常に規律正しい事が好きでいらせられます。朝の御起床から御拜、御食事、御通學、御復習、御運動、御入湯、御寢まで、實に規律正しい一日の御日課をお守りになつて、御變更なさる事はめつたにありません。随つていろくな事をあそばすにも、すべて規律正しい計畫を立てて、組織的にあそばすといふ御性質であらせられます。

それから陛下は公平無私な御方であらせられます。例へば、戦争ごつこをなさつたあとで、私はその審判をして、勝敗をきめ、講評などをする時に、御自分の方に不利な事であっても、決してお隠しなさらずにお申し出になる。角力で陛下

例へば

お隠しなさらず

投げられて

が相手を投げられて、軍配が御自分に揚つても、行司の氣附かなかつた少しの踏切でも御自分にあると、これは私に踏切があつたから負であります。と御主張になる。審判官や行司が少しでも不公平な審判をすると、非常にお厭がりになる。仲間の者が、その方が都合がよいではありませんか。などと申しますと、そんな不正直な事はいけない。と仰せになる。御判断に決して私心を挟まれない。

それであるから、歴史上の事實を御批判なさる時など、實に理路井然、公明正大で、よく大局から斷案をお下しになる。實に陛下の御心は、さながら少しの曇もない明鏡であらせられます。それ故、陛下の御心鏡の前に立つては、正邪善惡の

申し

さながら…であらせられる

姿がはつきりと映し出されて、少しも隠す事が出来ないの
であります。

陛下は非常に御仁心が深い。どちらかと申せば御口數の
少い方で、お世辭などは仰せられないが、まことに思遣の深
い御方であらせられる。随つて御幼少の時分から、普通の子
供にありがちな、友だちをいぢめるとか、意地悪い事をなさ
るとかいふやうな事は、決してありませんでした。そして友
だちに對しても、御側の者に對しても、好き嫌ひといふ事が
全くなく、一視同仁で、公平にお愛しになります。侍従や侍従
武官などに對しても、新舊の區別なしに、優しくお接しにな
るさうです。しかも舊い者を何時までもお忘れにならずに、

いぢめる

…やうな

さうです

許され

ロンドン(倫敦)
パリ(巴里)

覺えず

元の侍女だの御學友だのがお伺ひしますと、大變にお喜び
になりますし、また時々のお召もあります。私どもにも無論
その通りで、御誕辰やその他の御祝にはきつとお召があり、
御機嫌伺に出ればお喜びになつて、特別に拜謁を許され、お
暇の時は何時までもお引止になつて、お話し下さるのであ
ります。

大正十年の御外遊の時には、私はロンドンやパリでお迎
へ申し上げましたが、屢お召を蒙つて御陪食を賜はり、内外
諸名士の前でも先生々と仰せられるので、覺えず身の光
榮に感泣した次第であります。これは實に教育者の天職に
對する無上の光榮でありませう。人心がだんく荒んで、師

…どころか…
ない
實によい模範では
ありませんか

恩を忘れるどころか、全く念頭にも置かないやうな學生の
多い今日、陛下のなされ方は、實によい模範ではありません
か。

陛下の御盛徳を稱へ奉ると、まだ澤山ありますが、要する
に、陛下は御天性實に間然するところのないりつばな御方
で、まことに神々しい御性質をお生れながらにしてもつて
いらつしやると申し奉る外はありません。

(教育研究)

三 峠の茶屋

夏目漱石

夏目漱石
小説家。名は金之
助。東京市の人。五
十大正五年歿。年五
十。

「おい」と聲をかけたが返事がない。
軒下から奥をのぞくと、煤けた障子が立てきつてある。向

側は見えない。

五六足の草鞋が寂しさうにひさしからつるされて、屈託
氣にふらりと揺れる。下に駄菓子そまふなかしの箱が三つばかり並
んで、そばに五厘錢と文久錢とが散らばつてゐる。

「おい」とまた聲をかける。土間の隅に片寄せてある白の上
にふくれてゐた鶏が、驚いて眼をさます。くゝゝゝと騒
ぎ出す。敷居のそとに土べつつひが、今し方の雨にぬれて、半

分程色が變つてゐる上に、眞黒な茶釜がかけてあるが、土の
茶釜か銀の茶釜かわからない。幸ひ下は焚きつけてある。

返事がないから無斷ですつとはいつて、床几の上に腰を
かけた。鶏は羽ばたきをして、白から飛びおる。今度は疊

寂しさうに
ひさし(庇)

文久錢
江戸幕府が文久三
年(一八五三年)に
鑄造した穴明の銅
錢。

土べつつひ

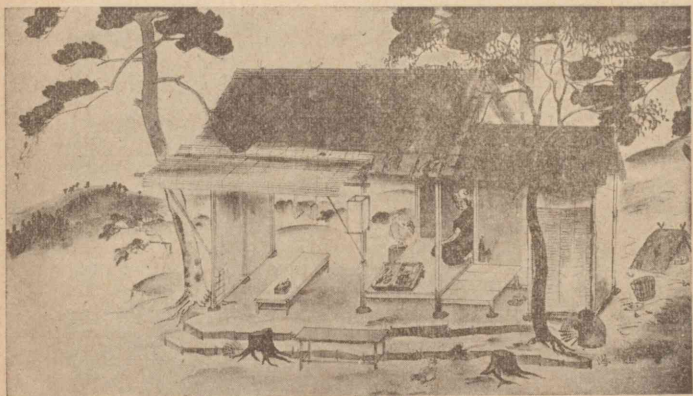
茶釜がかけてある

障子が締めてなければ

人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい

ひかへ(控)

をさまる(收)



(筆夫剛井白) 屋 茶 の 峠

の上にあがつた。障子が締めてなければ、奥まで駈けぬける気かも知れない。雄が太い聲で「こけつこつこ」といふと、雌が細い聲で「けつこつこ」といふ。まるで人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。

床几の上には一升枳程な煙草盆が閑靜にひかへて、中にはとぐろを卷いた線香が日の移るのを知らぬ顔で、頗る優長にいぶつてゐる。雨は次第にをさまる。

暫くすると

……だらう

火は燃えてゐる

のんき(暢氣)

受取れない

暫くすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりとあく。

中から一人の婆さんが出た。

どうせ誰か出るだらうとは思つてゐた。へつつひに火は燃えてゐる。菓子箱の上に錢が散らばつてゐる。線香はのんきにいぶつてゐる。どうせ出るにはきまつてゐる。しかし、自分の店を明放しても苦にならないと見えるところが、都とは少し違つてゐる。返事がないのに床几に腰をかけて、何時までも待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。こゝらがまことに面白い。その上出て來た婆さんの顔が氣に入つた。

寶生
能の流派の一。

高砂
謡曲の一曲。播州
今の高砂の松の下
郡高砂の松の下
で爺と婆とが肥後
國へ熊本縣の阿
蘇の神主友成と
語る一曲。
はうき(箒)
向ひ合ふ。

通はした

二三年前寶生の舞臺で高砂を見た事がある。その時これ
は美しい活人畫だと思つた。

はうきを擔いだ爺さんが橋懸を五六歩來て、そろりと後
向になつて婆さんと向ひ合ふ。この向ひ合つた姿勢が今で
も眼につく。余の席からは婆さんの顔が殆ど眞向きに見え
たから、あゝ美しいと思つた時に、その表情はびしやりと心
のカメラに焼きついてしまつた。
自分の暗箱にはつきりどろつた

茶店の婆さんの顔は、この寫眞に血を通はした程似てゐ
る。

「お婆さん、此所をちよつと借りたよ。」

「はい、これは一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

あいにく(生憎)

ござんしよ
上げましよ

休んだら

「あいにくなをりのわるいお天氣で、さぞお困りでござんしよ。お、お、
大分おぬれなさつた。今火を焚いて乾かして上げましよ。
其所をも少しもしつけてくれ、ば、あたりながら乾かす
よ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあお茶を一つ。」

と、立上りながら、しつくと鶏を追ひさげる。こゝ、こゝと駈
出した夫婦は、焦茶色にまじる焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏附けて、往
來へ飛出す。

「まあ一つ」と婆さんは何時の間にか、くりぬき盆の上に茶
碗を載せて出す。

梅の花が：：焼附
けられてゐる

茶の色の黒く焦げてゐる底に、^{さういふ筆でまじりこ}筆描の梅の花が三輪無
造作に焼附けられてゐる。

「お菓子をと、今度は鶏の踏附けた胡麻ねちと微塵棒とを
持つて来る。」

婆さんは袖無の上からたすきをかけて、へつつひの前に
うづくまる。余は懐から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を
寫しながら、話をしかける。

「閑静でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「え、毎日のやうに鳴きます。こゝらでは夏も鳴きます。」

たすき(襷)

うづくまる

お寒がる



夏目漱石

「聞きたいな。ちつとも聞えないとなほ聞きたい。」

「あいにく今日は、——さつきの雨でどこぞへ逃げました。」

^{すくなく}をりから、へつつひの中が

ばちくと鳴つて、赤い火が

さつと風を起して、一尺餘り

吹出す。

「さあ、おあたり。さぞお寒か

ろ。」と言ふ。軒端を見ると、青い

煙が突當つて崩れながらに、微かな痕をまだ板びさしにか

らんでゐる。

「あゝ、いゝ心持だ。お蔭で生返つた。」

そら

「いゝ工合に雨も晴れました。そら、天狗岩が見え出しまし
 た。」
 逡巡として曇りがちな春の空をもどかしとばかりに吹
 拂ふ山嵐の思ひきりよく通り抜けた前山の一角は、未練も
 なく晴れつくして、老嫗の指さす方に、あら削りの柱の如く
 聳えるのが天狗岩ださうだ。」

(章枕)

四 犬ころ

二葉亭四迷

うれしいにつけ、悲しいにつけ、思ひ出すのはポチの事だ。
 春雨のしとく降るうすら寒い、或夜の事であつた。私は例
 の通り宵の口から寝てしまつたが、ふと目を覺すと、耳元近

二葉亭四迷
 明治時代の小説家、本姓名は長谷川辰之助。愛知県川辺郡(二五六年)に生れ、四十九年(一九一四年)に歿す。

さながら……のやうな

いびき(鼾)



二葉亭四迷

くに妙な音がする。ごうといふかと思へばすうと、或は高く、
 或は低く、單調ながら拍子を取つて、さながら大鋸で大丸太
 を挽割るやうな音だ。私は夜中にめつたに目を覺した事が
 ないから、初はびつくりした
 が、よく研究してみると、なに
 父のいびきなので、やつと安
 心して、そのまゝ再び眠らう
 としたが、どうもこれが耳に
 ついて寝附かれない。仕方がないから、聞えるまゝにその音
 に聽入つてゐると、何時からともなく、雛子の手がこんで來
 て、合の手に遠くで微かにきやんぐといふやうな音が聞

四 犬ころ

える。いびきが凄じい時には、それに氣壓されて聞えぬが、いびきが低くなるとはつきりと手に取るやうに聞える。不思議に思つて益耳を澄ましてみると、次第に大きく高くなつて、遂にいびきと離れくくに、確かに門前に聞える。

かとすれば
あくび(欠伸)
かうなつて見ると、疑もなく小犬の啼聲だ。時々喉でも締められるやうに、けたましくきやんくと啼き立てる。その聲尻がやがてだんくに細く悲しげになつて、めいるやうに遠いく所へ消えて行く。かとすれば、忽ちまた近くで堪へきれぬやうに啼き出して、くんくと鼻を鳴らすやうな時もあり、ぎやおとあくびをするやうな時もある。

私はそつと夜著の中から首を出して、「小さい犬の聲だね

どうしたんでせう。
門前の前
小犬かなくと

え。どうしたんでせう。」と母に聞くと、母は優しく、「どこかの人が棄てた犬でせう。」と言つて、「もう晩いから黙つておやすみ。」と、あちらを向いてしまつた。

私もまた夜著をかぶつた。犬は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるにつけて、父のいびきがまたうるさく耳に附く。寝られぬまゝに、私は夜著の中で、棄犬の有様を繰返し々考へた。

ちつぽけな
なめる(普、舐)
まづどこかの飼犬が縁の下で兒を生んだとする。ちつぽけな、むくくしたのが重なり合つて、首をもたげて乳房を探してゐるところへ、親犬が餘所から歸つて来て、その側にどさりと横になり、片端から抱へこんでなめると、小さいか

たわいもなく

ら、舌の先でたわいもなくころ〜とところがされる。ころがされては大騒して起返り、またよち〜とはつて、ぼつちりと黒い鼻づらでお腹をさぐりまはり、漸く思ふ柔かな乳首をさぐり當て、あわてて吸附いて、小さい兩手で揉立て揉立て吸出すと、甘い温かな乳汁が出て来て、喉へ流れこみ、胸を下つて、なんとも言へずおいしいと、腋ワキの下から、まだ乳首にあり附かぬ兄弟が、鼻づらで割りこんで来る。取られまいとして、産毛の生えた腕を突つ張り、大騒をやつてみるが、たうとう取られてしまひ、またそこらを尋ねて、他の乳首に吸附く。

あわてて

たうとう(到頭)

そのうちにお腹もくちくなり、親の肌で身體も温まつて、

ちき

とろけさうな好い心持になり、ついうと〜となると、含んだ乳首が脱けさうになる。夢心地にもあわててまた吸附いて、一しきり吸ひたてるが、ちきにまたたわいなくうと〜となつて、乳首が遂に口を脱ける。脱けるも知らずに口を開いて、小さい舌を出したなりで、一向正體がない。その時忽ち暗闇から大きな腕がぬつと出て、正體なく寝入つてゐるところをむづとつかみ、宙につるす。驚いて目をばつちりあげ、いたいけな聲で悲鳴を揚げながら、四足を張つてもがくうちに、頭から何かで包まれたやうで、眞暗になる。窮屈で息が塞がりさうだから、出ようとするが出られない。暫くもがいてゐるうちに、ふと足搔あかが自由になると、襟元をつかまれて、

むづと

つかむ(掴)

出ようとする

すていねいして
のさうぞう

ぬれしよぼたれ

高いく所からどさりと落された。うろくとして、そこら
を視廻すけれど、なんだか變な寂しい眞暗な所で、誰もみな
ぼんやりとしてゐると、雨に打たれて、見る間にぬれしよ
ぼたれ、恐しく寒くなる。身ぶるひ一つして、くんくと親を
呼んで見るが、何所からも出ては來ない。途方にくれて、よち
よちとはひ出し、夜中にたゞ獨り、温かな親の乳房を慕つて
悲しげに啼き廻る聲が、さつき一度門前へ來て、また何所へ
かさまよつて行つたやうだつたが、それが何時かまた戻つ
て來て、何所をどうもぐりこんだのか、今は啼聲がまさしく
玄關先に聞える。

その夜を啼き明さ
れる

明くる日

おぼんだけ家に
おれた
犬きらいなまき
犬になれるやう
になつた

私はたまらなくなつて、母に頼んで、この小犬に食物を與
へて、一晚泊めてやる事にした。犬嫌ひな父は、泊めたその夜
を啼き明されると、うんざりしてしまつた。明くる日は是非
追出すと言出したから、私は小犬を抱いて逃廻つて、どうし
ても放さなかつた。父は困つた顔をしてゐたが、しかし、それ
も一時の事で、そのうちに小犬も獨寢に慣れて、夜も啼かな
くなる。追出すはずのものに何時しかポチといふ名まで附
いて、姿が見えぬと、父までが一緒に捜すやうになつてしま
つた。

(二葉亭全集)

宮崎丈二
詩人、洋畫家。明治三十一年生れた。本詩は縣に於て新書のものとして新書に採られた。

五 青 葉

宮崎丈二

1. 青葉のゆれるのを見てみると、
 なにかたのしい思に
 ゆられるやうだ。
 明るい五月の空に
 軽やかな青い翼よ。
 風も青葉を吹くのを
 喜んでゐるやうだ。
 2. 終日おとづれては
 たはむれてゐる、

光をゆりこぼしながら。

3. 青葉につままれた家々よ。
 見馴れた家々も、
 一層親しみ深くなつた。
 幸福な思をつゝんで、
 静もつてゐるやうだ。

4. 青葉の蔭の小徑よ。
 歩き馴れた小徑も、
 新しい喜、つきない魅力を秘めて、
 私を誘つてゆく、

しりあせ

徑—小道

全をきつては力
魅力
秘めて

感歎

どこまでも。

お、青葉青葉。

ゆれ、輝き、

あふれる青葉。

5. 明るい五月の空に

軽やかな青い翼よ。

六 明治神宮に詣でて

若葉の緑のすがくしい時候になりました。皆様お變りなくお過しの御事と存じます。入學以來まるで變つ

すがくしい

一、おまじ

しまひました

人時候

2、御無沙汰

3、新しき校

くはしく

た學課の豫習復習に追立てられて、思ひながらつい御無沙汰いたしてしまひました。此頃になつて學課や學校にも馴れ、先生方や上級のお姉様方にも親しまれて、やつと落著いた氣持です。長い間御無沙汰いたしました御詫に、今日は昨日の日曜に參拜いたしました明治神宮の事をくはしく申し上げる事にいたします。

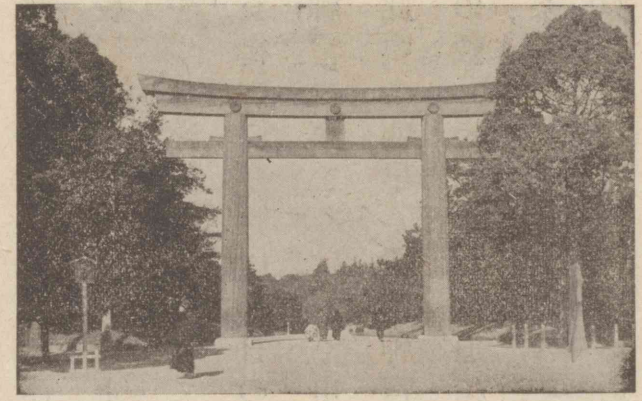
此頃の朝早く明治神宮の森に入つて、感じのよい白砂の敷詰められた參道に立つと、もうそれだけで胸の底まで清められて、晴々とした明るい心持になります。東京にも神社は數多くありますが、このお宮の森程、神域といふ感じの深い所は外に餘りないでせう。

神宮のまはりの森がめぐること
内苑

明治神の神域

1、白砂の参道
2、木林
3、造營

4、本殿
5、舊御苑
6、兩御神
7、御徳王和の女神
8、昭憲皇太后
9、新貝物殿
10、参道



居鳥の一

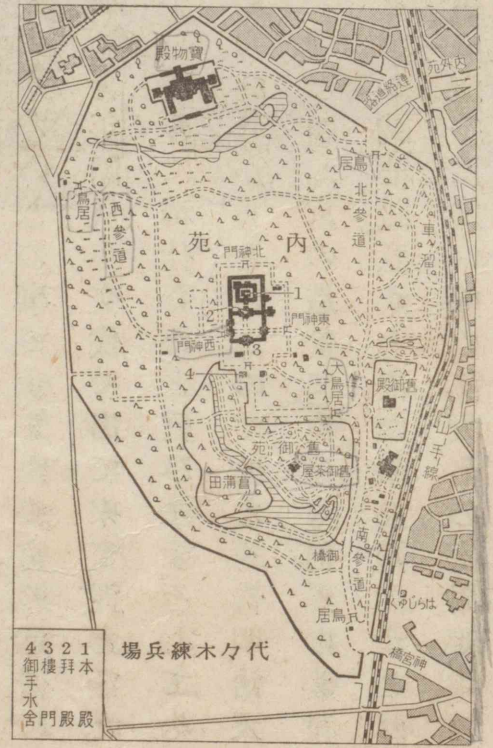
神宮橋を渡つて一の鳥居をくゞり、兩側の森の緑濃い美しい玉砂利道を、大鳥居のあたりまで来ると、何だか山の社へでも来たやうで東京にゐる氣がしないとは、誰でもよく言ふことですが、實際此所へは、近代的な都會の騒音も埃つぽい空氣もはいつては来ません。神の森が、あらゆる汚を濾過して淨めるのです。聞くところによりますと、明治神宮が造營される

雑木林と……と

9、外苑
10、参道

あらせられる

までのこの邊は疎らな雑木林と竹藪と、わづかな耕地とが見られたただけだつたさうですが、それが今のやうなりつばな森になつたのは、皆この神宮の祭神であらせられる明治天皇昭憲皇太后御二柱の御徳の力と、それを崇仰し奉る國民の熱誠の力とによるのです。内苑を形作つて



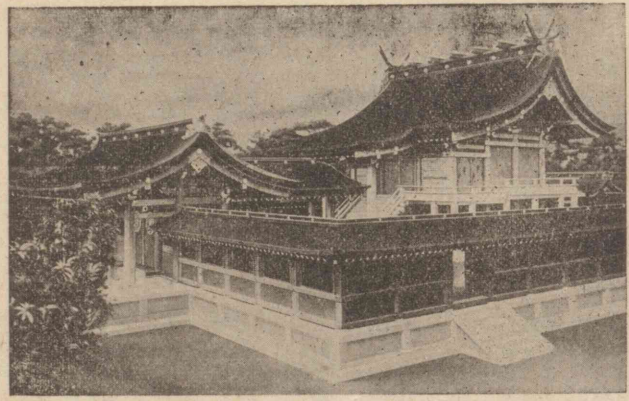
女子新國文 卷一 獻納 獻納 獻納 獻納

泥と汗とに
まみれる(塗)

日光東照宮
別格官幣社。徳川
家康を祀る。現存
の社は三代將軍
家光の造營。
阿里山
臺灣の臺中州臺南
州に跨がる。新高
山の西。海拔二六
五二メートル。全
山森林に覆はれ
の良材を産する。

ある神木の殆ど全部は、各地の人民から獻納したもので、中には村全體の者が總がかりで、はるゝ運びこんで來たのも少くないとの事です。またお宮の造營に就いても、各地の青年團員が交代で出て來て、泥と汗とにまみれながら、熱心に奉仕したと言ひます。そして、それも誰に勧められたからといふのではなく、皆明治天皇と昭憲皇太后とのお宮の造營に、自分も何かのお役を勤めたいといふ誠心誠意から出た事なのです。これは日光東照宮の造營に就いての諸大名の寄附が、半ばまで暗黙の強制に基づいてゐたのとは大變な相違です。私は阿里山の太櫓で造られた大鳥居をくゞつて、玉垣

鳥居の前へ行くまで、いろ／＼と考へ續けてゐました。



御本殿

神となつて今も御本殿の奥深くおはしますのです。兩

おはしますのです

ふる／＼

御祭神のうちでも殊に昭憲皇太后は、この代々木の自然がお好きで、ちやうど今、參道の兩側に分れて残つてゐる舊御苑へ屢、行啓あそばして、武藏野の面影をしのばせる林中の御逍遙や舟遊、釣魚などをこの上もなくお楽しみになつたと承つてゐますが、當時御休憩になつた御殿や、御茶屋、御遺愛の菖蒲田などがそのまゝ保存されて、毎年一定の時期には拜觀が許されるさうです。

並ばせ給うて

私はこの御思出深い代々木の土地に昭憲皇太后の御神靈が明治天皇の御神靈と並ばせ給うてお鎮まりになつてゐる事を嬉しく思ひます。

お祀り申して

神功皇后
第十四代仲哀天皇
の皇后

良シキ
良襟

……ばかりか……

我が國には、女性神を祀つた神社は幾らもありますが、皇后としてお祀り申してあるのは、たゞ神功皇后と昭憲皇太后との御二方だけで、しかも神功皇后が仲哀天皇崩御の後を承けて、征戰にお従ひになつた男性的な方面をお祀りしてあるのに對して、昭憲皇太后は徹頭徹尾女性神として祀られてゐるので、明治天皇が維新の偉業を御大成になつた聖徳の高さは今更申すまでもありませんが、内にあつて宸襟を慰め奉り、いろいろと人知れず御心を配つて、宮廷の空氣を和やかにあそばしたばかりか、進んで各種の文化事業にお力を注がせられ、一般女性の自覺を喚び起して、その社會的地位

お讚へ申さねばならぬ

置をお高めになられた昭憲皇太后の文化的御功勳には、眞に平和の女神としてお讚へ申さねばならぬものがあります。明治神宮の御祭神としてこの平和の女神をお祀り申してあるといふ事は、日本人の神社崇敬に、新しい生命を注ぎこんだものであると思ひます。明治時代の女性の美點を御一身にお集めになつて、事ごとにそれを御發揮あそばされた御逸話は、口に、筆に、今も傳へられてゐますが、私は兩御祭神の數々の御神徳を、また今更のやうに思ひ浮べながら、西神門から寶物殿へ向ひました。そして其所でもまた、明治天皇の御雄々しさに對して、昭憲皇太后の女性らしい典雅な御趣味

御發揮あそばされた

たとひ……神去られましても

と、お優しいお心づくしとを、御遺愛品の上に拜しました。明治天皇の御製の御草稿を昭憲皇太后が御筆記になつてあるのを、も拜見しました。かういふものに對しますと、たとひ明治の天皇皇后は神去られましても、その御精神は永久に歴然と輝いて、私どもの行く手を御指導あそばされてゐるのだと心強く感じます。

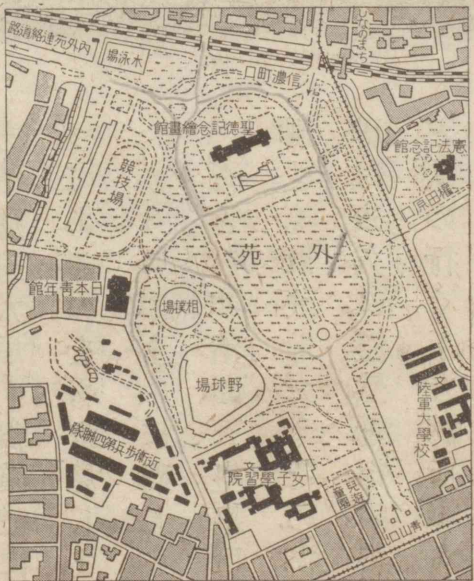


寶物殿

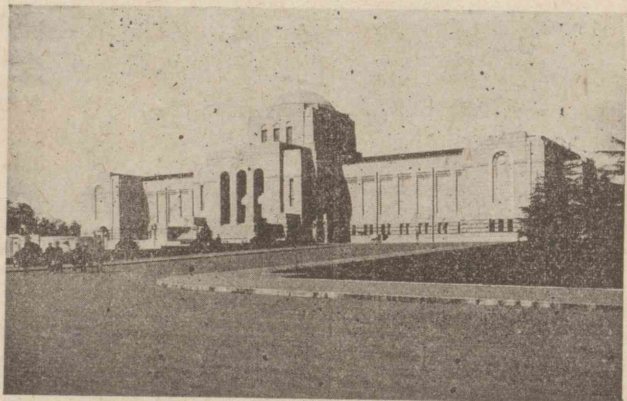
アスファルト(土漑青)
ぬれる(濡)

いはゆる(所謂)
生き／＼した

北參道口を出ると、少しばかり雨が降つて來ましたが、アスファルト道がわづかにぬれる程度で、卻つて快い氣持でした。振返つて見ますと、内苑の森にはうつすらと靄がかゝつて、名家の水彩畫を見るやうです。この内苑と外苑とをつなぐ裏參道は、表參道よりもよい感じですよ。いはゆる名所に通有な土産物店などが一つもなく、兩側を植樹帯の生き



(外苑) 地圖



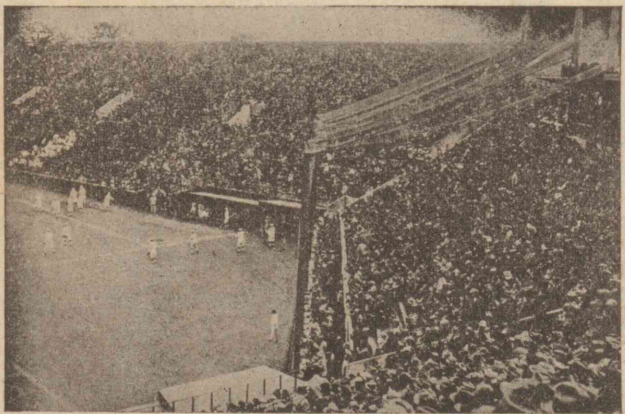
聖徳記念繪畫館

生きした新緑が彩つてゐるのも、神域から神域への路といふのにふさはしいと思ひます。
外苑では近代的庭園の明るさが、晴れやかに目立つて感じられます。何時しか雨も晴れて、小雨に一入色増した、廣くと展開してゐる大芝生庭の緑を背景にして、逍遙嬉戲する男も女も、大人も子供も、皆自由と快活とに充ちてゐるやうに見えます。明治天

聖徳記念繪畫館
明治天皇及昭憲
皇太后の御蹟を
飾られた壁畫を以
て現存の壁畫は
日本畫、洋畫、日
十題の揮毫になつ
てゐる。

女子學習院
赤坂區青山北町。

皇の御一生を謹寫した壁畫を以て飾られてゐる聖徳
記念繪畫館や、野球場競技場
水泳場など、此所には私たち
の心をひくものが多くあり
ますが、私はこの外苑に近く
接して、女子學習院の建つて
ゐるのを見て、殊に女子教育
に御熱心であらせられた昭
憲皇太后の御上にまた思を
馳せました。青山口の傍にあ
る兒童遊園では、大勢の幼兒たちが仲よく無邪氣に遊



野 球 場

たへ(湛)
つたなり
まがし
漂うてみました

たそがれ
夕方のこと
かきこもなかり
社
紅 樂
仲よくたの
しむを

んでみました。お優しい御祭神方も、きつと和やかな御
微笑をたへへられて、遙かに御覽あそばしてをられる
事でせう。電車通へ出ると、もう町にはうつすらとたそ
がれの色が漂うてみました。
別封の繪はがきは、その電車通の店で求めました。つく
しきれぬつたない筆の跡をおしのび下さいませ。かし
こ。

自傳文

産土神と氏神

家が集つて村をなし、郷をなす。其所には村社、郷社がある。ちや
うど一家の中に神棚があると同じである。その神社を中心とし

産土神と氏神(自傳文)

和樂
仲よく楽しむ。

村の中心
なす神社

の宮

田舎の神

の祭

宮相撲
お宮の祭に行はれ
る素人相撲

村芝居

村々のお祭などを
當てこんで巡業し
て歩く芝居。また
村の若衆の素人芝
居。こゝはどちら
でもよい。

娛樂
たのしみ。

て家々の祖先が和樂し、團結したやうに、代々の子孫が和樂團結して行く。或は小高い岡の上に、或はよく耕された田圃の間に、こゝもりとした松、杉などの木立につゝまれたお宮がそれである。茂つた森の端に鳥居が見え、石燈籠の見える景色は、外國には決して見られない我が國特殊の景色で、これがまた我が國特殊の歴史と國體とを語つてゐるものである。

かういふ神社が、産土の社である。子が生れて三十二日、または三十三日目にお宮參をするのは、この産土神へ參るのである。この郷土の一家に新しい小國民が生れた事をお知らせするのである。産土神は郷土の守護神である、豊かな秋の實のりの後では、この守護神の境内やその附近に、宮相撲の行はれる事もあり、村芝居の催される事もあつて、娛樂の中心地ともなる。神代の昔、天の岩戸の前で神々たちが神樂を催されたやうに、村人は此所に

集つてお祭をするのである。大人も子供も一緒になつて楽しむのである。

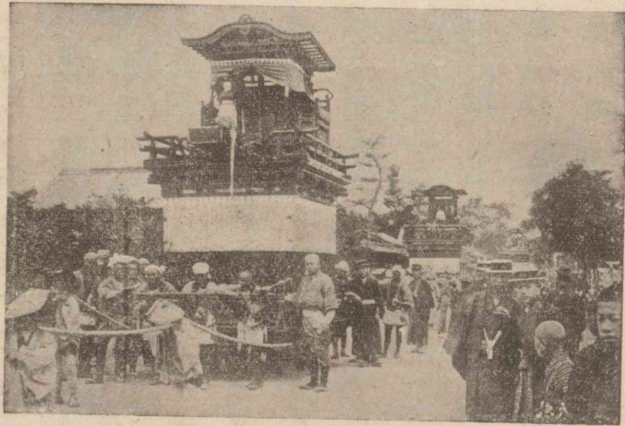
木
山
花
山
車

花山車
美しい山車。山車
はお祭の時車にい
ろいろなものに飾
り、または舞臺を
設けて、踊などを
しながら、人また
は牛などに曳かせ
るもの。

昔の花山車の云々
昔の山車に飾つた
人形を飾るといふ
意。

祭提燈
お祭禮などと記し
て各戸に掲げるお
祭用の提燈。

樽御輿
樽で作つた小さな
御輿。今では樽の
みではなく、本物
の御輿風の小さく
作つたものもいふ。



(祭手土の丘大) 車 山

といふ事は、今の東京などにも遺つてゐる。神社の境内、神樂殿で

産土神と氏神(自修文)

里神樂
禁中では行はれる
外に方々の神社で
行はれる俗間の社
樂はまた神の祭
禮などに假面を被
つて舞ふもの

3. 氏神のミコ
についで

春日神社
奈良市春日野町に
ある。官幣大社。一
和銅二年(一三六
九年)藤原不比等
の勸請したもの

元服
少年が始めて大人
の服を着、冠を加
へて大人となる禮

寄留民
本籍地以外の地に
住居する人

4. 産土神
氏神は祖
先に關係
縁故がある

は里神樂を奏する事も多い。この日家々では赤飯をたいたりして祝ふのである。
産土神と氏神は別である。氏神は同じ氏の人々の尊崇した神である。これは家がだんく大きくなつて分家の分家、またその分家が出来るやうになつて、一族が多くなつて來たので、祖先を同じうする者が共同に祭つた神である。家の中の神棚を更に大きくしたやうなものである。一例を言へば、藤原氏の氏神は大和國の春日神社で、遠つ祖の天兒屋根命を祭つてゐるのである。源氏の氏神は八幡神社であるが、これ



御輿 興 か き

は頼義義家が尊崇し、義家は八幡神社の社前で元服をして八幡太郎義家と名のつた程であつたから、源氏では代々氏神とする事となつたのである。言ふまでもなく、家を重んじ祖先を尊ぶ風から起つたのである。

今日では各市町村の住民は本籍の人とはもとより、寄留民でもその居住地の神社を産土神として尊崇し、さうしてその氏子となるので、産土神は氏神と同じやうになつた。

郷土の神、氏の神、いづれも祖先に關係縁故があつて、子孫から見れば懐かしい親しみがある。郷土の人々はこれを中心として團結するのである。

島崎藤村
詩人、小説家。名
は春樹。明治五年
長野縣に生れた。

七 しあはせ (寓話)

島崎藤村

迎へて

「しあはせ」がいろ／＼な家へ訪ねて行きました。誰でも「しあはせ」の欲しくない人はありませんから、何所の家を訪ねましても、きつとみんな大喜びで迎へてくれるに違ひありません。けれども、それでは人の心がよくわかりません。

そこで「しあはせ」は貧しい乞食のやうな服装をしました。誰か聞いたら、自分は「しあはせ」だと言はずに「貧乏」だと言ふつもりでした。そんな貧しい服装をしてゐても、それでも自分をよく迎へてくれる人がありましたら、その人の所へし

あはせを分けて置いて来るつもりでした。

「この「しあはせ」がいろ／＼な家へ訪ねて行きますと、犬を飼つてある家がありました。その家の前へ行つて「しあはせ」が立ちました。

其所の家の人は「しあはせ」が来たとは少しも知りませんから、貧しい／＼乞食のやうなものが家の前にあるのを見て、

「お前さんは誰ですか。」

と尋ねました。

「わたしは「貧乏」でございます。」

「あゝ、「貧乏」か。「貧乏」はうちぢやお斷りだ。」

二、犬がかつてある家

と、其所の家の人は戸をぴしやんと締めてしまひました。おまけに、其所の家に飼つてある犬が怖しい聲で、追立てるやうに啼きました。

「しあはせはさつそくごめんを蒙りまして、今度は鶏の飼つてある家の前へ行つて立ちました。

其所の家の人もしあはせが來たとは知らなかつたと見えて、厭な者でも家の前に立つたやうに顔をしかめて、

「お前さんは誰ですか。」
と尋ねました。

「わたしは『貧乏』でございます。

「あゝ、『貧乏』はうちぢや澤山だ。」

と、其所の家の人は深いため息をつきました。それから飼つてある鶏に氣を付けました。貧しいく、乞食のやうな者が來て、鶏を盗んで行きはしないかと思つたのでせう。

「コッ、コッ、コッ。」

と、其所の家の鶏は用心深い聲を出して啼きました。

「しあはせはまた其所の家にもごめんを蒙りまして、今度は兎の飼つてある家の前へ行つて立ちました。

「お前さんは誰ですか。」

「わたしは『貧乏』でございます。

「あゝ、『貧乏』か。」

と言ひましたが、其所の家の人が出て見ると、貧しいく、乞

鶏を盗んで行きは
しないか

三にはどりの
かつてある
家

たくあん(澤庵)
おこままで…
添へてくれました

食のやうな者が表に立つておました。其所の家の人もしあ
はせが来たとは知らないやうでしたが、なさけといふもの
があると思えて、臺所の方からおむすびを一つ握つて来て、
「さあ、これをおあがり。」

と言つて、くれました。其所の家の人は、黄色いたくあんのお
こままでそのおむすびに添へてくれました。

「グウ、グウ、グウ、グウ。」

と、兎は高いいびきをかいて、さも楽しさうに晝寝をして
ました。

「しあはせは其所の家の人の心がよくわかりました。おむ
すび一つ、たくあん一切れにも人の心の奥は知れるもので

しあはせの家の
ある



しあはせ 河内舟人筆

初夏

す。それを嬉しく思ひまして、その兎の飼つてある家へしあ
はせを分けて置いて來ました。

八 苺

五十嵐 力

初夏と梅雨とを思ふとすぐに私の心を躍らせるもの
があります。

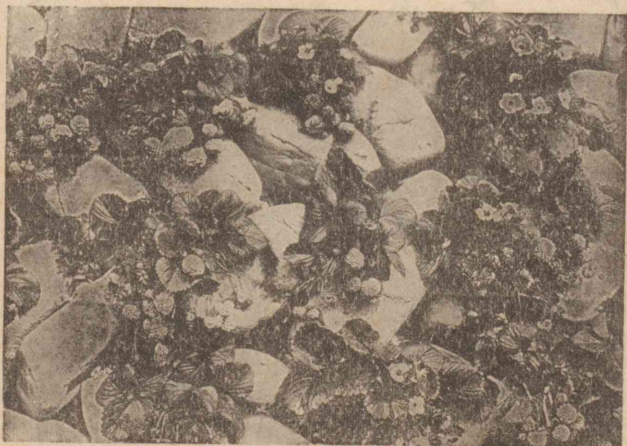
苺です。——私は苺なしに春から夏に越えることが出来
ません。水菓子の類のうちで、私にとつて苺ほどうまいもの
はありません。で、その培養には一番に骨を折ります。他の草
木に一度か二度やる寒肥を、苺には三度からやるのもその
爲です。

五十嵐力
國文學者。文學博
士。早稻田大學教
授。明治七年米澤
市に生れた。

作者が、
こがすさであ
る
いたはり
大切に取
あつかつて

五月から六月
の間にわたる
二十日間の
盛りの
苺

五月から六月にわたる苺の盛りの二十日間は、私にとつて實に舌のお正月です。同時に腹のお正月でもあり、目のお正月でもあり、頭のお正月でもあります。朝早く起きて雨戸を一枚繰る。寝衣のまゝすぐに飛出して、跣足で朝露を踏んで苺畑に行く時の心持。莖の長い濃緑の厚い葉が、銀のやうな朝露に光つて、その間に眞紅の珠の見え隠れに連なつてゐるのを見た時の心持。脚は膝まで、手は



苺

そろふ(揃)

文明とは家族
と一緒に卓
を圍んで苺
を食ふこと
なり

二の腕まで葉末の露にひたして、丸々とした紅玉を草の枝から目籠に移す時の心持。一つの房に眞赤のから桃色、桃色のから白と、尖頭になる程だん／＼小さくなつて、行儀よく鈴なりになつてゐる、その中から小さい、若いのをいたはりつゝ、本なりの大きい眞赤なのを摘取る時の心持。摘終つて、目籠に山なす紅玉を携へつゝ、朝日に照されて、足をすゝいで家に入る時の心持。綺麗に洗つて、大きな古今里の皿に盛つて、食卓に安置して、家内そろつて舌鼓を打つ時の心持。ああ、何と言ひませう。

或人は、文明とは家族一緒に卓を圍んで苺を食ふことなり。と言つたと申しますが、私は百姓をやりつゝ、そして本を

讀みつゝ、苺を食ふといふ事に於て、野蕃と文明と、土の趣味と天の趣味とを同時につかみ得たやうに思ひます。

苺は澤山取れますが、一々砂糖をかけて食べることは私どものよくするところではありません。それ故、大抵は鹽をふりかけて食べます。それで非常に結構です。一週に一度くらいは破格に砂糖を添へます。一倍うまく感じます。稀には砂糖の外に牛乳を添へます。實に咽喉のどから佛になるやうに感じます。かういふ場合に、子供等は「頭が笨ばかになる」と言つて喜びます。何の事だか知りませんが、私の郷里では、非常にうまい物を食べた時に「頭が笨ばかになる」と言ふのです。

餘つた時には、ジャムを作ります。ゼリーもこしらへます。ま

餘つた時に
は、こしらへる
ます。また、苺酒
ます。また、苺酒
ます。

た苺酒なども作ります。そして或はパンに附けて賞味し、或は夏時分の飲料にいたします。

私の苺畑は八疊間の三四倍もありませう。それで一春に、水菓子屋から買へばかれこれ十圓くらゐに値する紅玉が取れます。その外に、一昨年などは、春はその畦の間に甲州馬鈴薯いんげいを作つて、二斗以上も取りました。秋は練馬を作つて相撲取の腕のやうなやつを百本以上も取りました。春の紅玉はその副産物として、夏の茶褐玉ちあひだまと秋の雪白根せつぱくこんとを與へてくれるのです。

うまい話ばかりして、ついその出所を言ふのを忘れてをりました。私の苺は六年前に、余丁町の坪内先生から頂い

練馬
練馬大根。東京市
板橋區練馬に産す
る。

余丁町
東京市牛込區。
坪内先生
坪内逍遙。

て、片手に軽々と提げて来た、それが蕃殖して今日の隆運を
來したのであります。
(野草集)

九童心

北原白秋

聖心は童の心である。

越後の良寛禪師は、殊にこの童心の持主であつた。かうい
ふ話がある。

一に童男、童女、二に手毬、三にお弾き。これが禪師の三好と
いふ。これで見ても、良寛様がどんなに子供が好きで、子供た
ちと遊ぶ事が、またどんなに嬉しかつたかと思はれる。
その良寛様も、子供たちには随分ばかにされて、盛んにな

北原白秋
詩人、歌人。名は
隆吉。明治十八年
福岡縣に生れた。

良寛
越後國(新潟縣)
出雲崎の僧。和歌
及び書を善くした。
一天保二年(二四九
五年)寂。年七十九。

し：たり…たり
した

をられた

何がな欲しくなる

良寛様も何も



手毬(河内舟人筆)

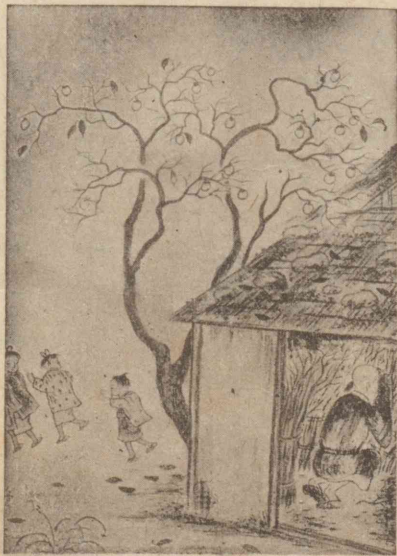
ぶられたり、からかはれたりしたりらしい。それにも拘らず、平
氣で一所懸命に遊んでゐた良寛様がありがたい。

或時、例の通り、子供たちと隠
れんぼをしてをられた。鬼にな
つた良寛様が目を瞑つて、「もう
いゝよ」といふかはいゝ聲を、一
心に待受けてをられる。とちや
うど日の暮時で、子供心の何が
な欲しくなる時である。家々の

燈がちら〜つき出すと、子供たちは急に遊を止めて、一人
残らず、こそ〜と歸つてしまつた。そこは子供だから、良寛

様も何もうつちやらかしてである。無論いくら待つても「もういゝよ。」と言ふ者はない。そのうちに日が暮れ長い夜が来た。さうしてたうとう夜が明けてしまつた。良寛様はそれでも一所懸命だ。心から目を瞑つてやはり同じ姿をしたまゝ、「もういゝよ。」と子供が呼ぶのを待つてをられた。その心の素直さ、そしてその誠の篤さ、正直さ。

それからまた或時の事である。良寛様が今度は隠れる事になつた。そこで見附けられては大變だといふので、さつそ



(筆人舟内河) ぼんれくか

御存じない

はづす

あわてて

く田圃の稻叢の中にもぐりこんで、それはかはいらしい事だ、それはく、小さくなつて、まるで二十日鼠のやうに、頭からすつぽりと鼻をかぶつて、おどくしてをられた。すると子供たちは、また例の通り一人残らず、こそくと歸つてしまつたのである。それを良寛様は、少しも御存じない。また日が暮れて夜が来て、また夜が明けた。稻叢には霜が眞白に置き、朝の日が昇り始めると、百姓がやつて来て、何の氣もなく稻束をやにははづすと、おやつと驚いた。良寛様が小さくなつてもぐつてをられる。おや、良寛様が」と言ふと、あわてて、「そつとしろ、そつとしろ。子供が見附ける。」

その心のあどけなさ、ありがたさ、まるで子供である。

沙門良寛全傳
西郡久吾編。北越
偉人沙門良寛全傳。

面を赤くなさる

また或日の事である。その良寛様が、男の兒や女の兒たちとお弾きをしてをられた。沙門良寛全傳に「禪師頗る大勝を博して、賭物のいり豆を多く得」と書いてあるから、餘程ののり氣であつたらしい。ちやうどその時、誰かゞはいつて來た。そして「おやゝ良寛様、なかゝあなた様はお弾きがお上手で」とほめると、罪のないこと、良寛様はぼうつと面を赤くなさる。まるで少女のやうに、さもゝ恥づかしさうに、そつとそのいり豆を膝の下におし隠したといふ。

その心のういゝしさ、そのきまりのわるさ、恥づかしさは、全く佛の前に子供らしくおとなしく、身をへりくだる心である。尊い聖心はすべてこの童心を源にする。

もう一つお話する。

或時、赤々と實がうれて、鈴なりになつた柿の木の下で、小さい子供が一人泣いてゐた。良寛様を通りかゝつて、どうしたんだと圓い頭をなでてやると、あの柿が食べたいと言ふ。よしゝ、それではわしが取つてあげる。泣くのではないぞ。と言ひながら、やつとこさと木の上にはひあがつた。枝にかまつて、あれかこれかとさがしてゐるうちに、それは全くうまさうな柿の實だ。一つ取つて口をつけると、それがおいしいのなんの。良寛様は夢中になつて、かじるは、かじるは、まるで猿蟹合戦の赤いお猿のやうに、むしやゝと食べてゐる。下にゐる子供こそあはれである。それを見て火のやうに

あの柿が食べたい

泣くのではないぞ

おいしいのなんの

かじる(齧) 柿

柿

稟 稟 藏 藏 藏

目 睨

泣叫ぶと、始めて良寛様も氣が附いた。さあしまつた、これはといふので、あわてて枝をゆすつたといふ話。

思うてもそのあわて方をかした罪のなさ、真正直さ、その子供らしさ、全く涙がこぼれる程嬉しいではないか。

禪師の玉のやうなこの童心は、榮藏といつた童の昔からそのまゝである。それは何物にも替へがたい、二つとない尊い天稟である。

まだ榮坊が八歳か九歳の頃だつたといふ、或日父親からひどく叩かれたので、つい上目をした。そこでまたく叩かれた。親を睨むやうな奴はかれひになるぞ。これを聞いた良寛様の榮坊は、外へ出て行つたが、日が暮れても歸つて來な

かれひ(蝶)

いはく(目)

ほんたう(本當)

ふるへてみた

子 供

い。さあ家内中大心配で、あちらこちらとさがしもとめると、或濱邊の岩の上に悄然と佇んで、沖の方ばかり眺めてゐた。「榮坊どうした」と言ふと、榮坊いはく、「おらまだかれひにならねえか」。

かれひになると言はれたので、ほんたうにかれひになると思つて、一心に海を視詰めてふるへてみた。童心の正直さ、これをこそ生一本と言ふのであらう。童を欺く大人こそ禍である。

聖心はこの童心を源とする。

(洗心雜話)

島村民藏
文學者、劇研究家。
明治二十一年東京
市に生れた。
ラファエル
(西紀一四八三—
一五二〇年)

蜜を集めるやうに

一〇 母 親

島村民藏

皆さんは大抵イタリーの有名な畫家のラファエルの描いたマドンナの像を知つてゐるでせう。

一體マドンナのやうな婦人は、實際この世の中にあるのでせうか。多分ゐないでせう。ではどうしてラファエルに、いふ繪が描けたのでせう。

ラファエルはあの繪に就いて自分で話した事があります。大勢の母親を見て歩いて、どの母親にも或一つの美しい點を見附けて、蜂が蜜を集めるやうに、それをすつかり寄集めて、あの一冊の名畫の中に纏めたのださうです。ですからあ

けれども
子の顔
のぞく
の顔
うちの顔
聖なる神
或物が
が神々しい神



(筆ラファエル) マドンナ

の繪にある氣高さと淨らかさとは、ラファエルが勝手にこしらへ上げたものではなく、平常の生活から採集したものだといふ事が皆さんにわかつたでせう。

マドンナの神のやうな純潔と比べられる婦人は、この世にはありません。けれども、我が子の顔をのぞく母親の顔のうちには、神聖な神々しい或物が表れてゐます。論より證據、ためして御覽なさい。マドンナの繪を見た後では、皆さん

は前までとは全く別な眼で、自分のお母さんを見るに相違ないでせう。

夕方、赤ん坊の寢床をのぞいたり、皆さんの弟や妹を抱きしめて顔を見たりする時、また皆さんが病氣をして看護される時、さういふ時のお母さんの様子を注意して御覽なさい。頭から後光ごくわうが射してゐないでせうか。本物の後光は射してゐません。が、しかし、さういふ瞬間には、お母さんは自分の事などは全く忘れて、たゞもう子供の事ばかり考へてゐるので、そこで顔の上に天女のやうな氣高さがみなぎり溢れるのです。

みなぎる(漲)

ですから人はよく、自分のお母さんは天使のやうな方だ。

と言ふのです。

世間には天使らしい母親が澤山ゐます。さうかと思へば、またまことに優しい、いゝ母親ではあるが、我慢のない爲に、すぐにくわつとなつて、子供にむごくするのもあります。ラファエルはさういふ事を残らず見聞きしました。さうして、その中に氣高い或物を見たのでした。皆さんのうちで、お母さんに對つて、どんな場合でも慎深く、愛情の濃やかな人があれば、その人は、ラファエルの眼を持つてゐるのです。この人には、母親の崇嚴な本體が見えるのです。

私は何時か一人の男の話を聞きました。その人の母親は、お伽噺に出て來る悪い狼のやうに、手の附けられないひど

さうかと思へば

私の何時か
一人の男が
話を聞いた

い女でした。けれども、その人はいかにももの優しく母を敬ひました。

「なぜお前は親にされた通りにしてやらないのか」と人に聞かれると、「私にはそんな事は思ひきつて出来ない。子供を抱いた母親は、どれも私には神聖だから。——自分の母は一人の子供を育て上げた人だから、自分は一生母に禮を盡すのだ」と答へたさうです。

私がよく見掛けるのは、息子や娘たちが大きくなるに随つて、次第に母親に對つて粗暴不遜になる事です。非難をすると、「それは母のせゐだ。母は何かにつけて口やかましく小言を言ひ、粗暴不遜の風を見せるから」と返答します。けれど

も、なぜ母親の痛癢は募るのでせう。なぜ神経が過敏になるのでせう。

皆さんがわづか一晚よく寝られないだけでも、どれ程神経が昂ぶつたり、不機嫌になつたりするか考へて御覽なさい。皆さんのお母さんたちは、皆さんの爲にどれ程多くの夜を眠らなかつた事でせう。皆さんが病氣になつた晩ばかりでなく、お母さんが皆さんの失策などを苦に病んでまどろまなかつた夜までも入れて言ふのです。その上、どれ程澤山な艱難辛苦にお母さんは堪へなければならぬか、皆さんにはわかりますか。さういふ艱難辛苦は、皆さんが大人になつて始めて聞かされて承知するか、それとも一生知らずに

眠らなかつた事でせう。

まる一年間、晝夜
寝る必要がない
ある必要がない
すところがある

終るのです。皆さんの爲に犠牲にした睡眠を取返す爲には、お母さんはまる一年間晝夜寝通しに寝る必要があるくらいです。ところが、お母さんにはさういふ暇がないので、そこで自然神経は昂ぶり、せつかちになり、怒りつぼくなるのです。皆さんのうちで、お母さんが自分の爲に身體を悪くしたのに氣の附く人は、お母さんに對して失禮な恥知らずなあいさつをした時、何時もきつと耳もとまで赧くなるに相違ないでせう。(フエンステル著、少年少女訓より譯出)

一一 母を頌ふ

西條八十

文字の中にて

いともなつかしき文字、
そは「母」。

いくたび紙にしるせども
おもひはつねに新たなり。

顔の中にて
いともなつかしき顔、
そは「母」。

日に三たび見て、日に三たび、
をどる心のあやしさを。

西條八十
詩人。早稲田大學
教授。明治二十五年
東京市に生れた。

心の中にて

いとも眞なるもの、

そは「母」。

いかなる重き罪人か

母のまことに泣かざらん。

この世にて

はじめて我を見たるひと、

そは「母」。

その日の清きおもかげに、
曇あらずな、母のため。

一三 白い國朝鮮 その一

中村亮平

朝鮮といへば純白の服装を思ふ。

それは夏の宵闇に、ふうはりと白い幻のやうに動く清淨な姿であつた。しかし、毎日白衣の人ばかり見馴れてゐると、その餘りな色彩の缺乏が、何とも言へない物足りなさを感じさせる。殊に秋から冬へかけての田舎の自然は、何所を見ても單調である。果てしもなく續く赭土と、稍調子が違ふ手近の壁と、くすんだ灰色の稟屋根との外、何所にも目に立つ

中村亮平
美術評論家。明治
二十年長野縣に生
れた。

赭土と、壁と、
稟屋根との外、

嘗て

東京帝國大學の赤門
 文政十年(二四八七年)徳川第十一代將軍家齊の女が加賀侯に嫁した時建てられた。國寶。
 大邱
 慶尙北道の南部。市は春秋二季にあり、來會者は數萬に上る。
 京城
 朝鮮の中心都市。總督府の所在地。
 平壤
 平安南道の西南部。京城に次ぐ大都市。
 開城
 京畿道の西北部。高麗の王都であつた。

變化がない。全く色彩を取りのけた世界といふ氣がした。私は嘗て北陸を行脚して、加賀の金澤に足をとどめた事があつた。軒並に見る格子戸や柱が、一樣にくすんだ赭い色に塗られてゐた。そこでふと此所の舊藩主の上屋敷であつたといふ東京帝國大學の赤門を思ひ出して、赭き都金澤と友人に書送つた事があつた。翻つて朝鮮はと問はれたら、私は即座に「白い國、どこまでも白い國」と答へるであらう。

異境の誘惑といふか、半島の何所に旅をしても、市日いちひ——市の立つ日が何よりの楽しみであつた。誰も知る大邱の藥令市をはじめとして京城、平壤、開城等に大きな市が開かれるが、田舎の中心地でも、それ相應に賑はひ、なか／＼盛んな

ローカル・カラー
 (地方色)



大邱の藥令市

ものである。一、六の日、或は二、七の日、または五の日といったやうに、定期的に開市するを例としてゐる。何を買はうといふあてもなく、市場を散歩する程興味のある事はなかつた。何しろ衣食住のすべてにわたつて、里人の生活に資する物が残らず展開されるのであるから、まさに朝鮮民族の生活的縮圖である。内地の縁日露店といった風であるが、もつと地方色が濃厚である。その日になると、白衣に黒い冠、白足袋に

おしあひへしあひ
する

草鞋、ゴム靴の人といった群集が、朝から夕闇の迫るまで、おしあひへしあひする盛況は、縁日以上と言つてよい。それが夜になると、あれだけの人数が何時何所へ行つたか、ひつそりと影を絶つてしまふ。點燈の設備のない日中だけの市、我が王朝時代の昔を思はせるやうなあくまでも原始的な光景である。

ふきのたう(蔭の
臺)

春先、赤いチ、コリ(上衣)を着た田舎娘が、ふきのたうや蔭を挿入れた箒を前に、市場の片隅にしよんぼりとうづくまつてゐるいぢらしい姿も見られる。

ひさぐ(鬻)

でも今では、冠を賣る店、草鞋をひさぐ店などは追々に廢れて、その代りに地下足袋やゴム靴が賣れ、烏打帽やソフト

のどか(長閑)

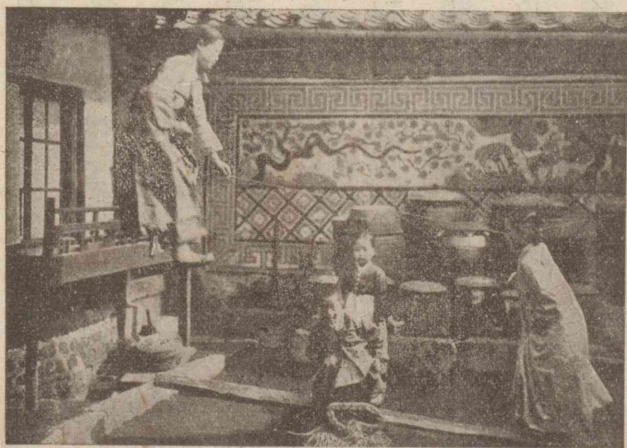
帽などが歡ばれる。この半島の一面にも移り行く時代相が、この市場の小景にもうかゞはれる。

朝鮮の正月は實にのどかである。風俗習慣の違つた半島に、旅人らしく住むといふ、かゝはりのない氣持のせゐもあらうが、毎日それは、冬らしい綺麗に晴れた爽かな日が續く。その濃い青色と言ふよりも、寧ろ群青に近い色をした深い大空の下で、何所へ行つても超板戲のぎつこんばつたんといふ異様な響が民家の庭から聞えて來る。まだうら若い娘たちが、原色に近い赤や青の單色の晴著を着飾つて、超板戲をしてゐる。これは古くから朝鮮に行はれてゐる遊戯で、殊に女兒が好んでするものである。中央に藥束のやうな枕を

さながら……のやうである

置き、それに板を載せて、稟東の反動と、上手にこなす全身の浮せ方とによつて、土塀よりも高く、家の棟ウシヤよりも高く上る。常には深窓フカマドに閉籠トコメつてゐる子女が、中天に身を浮す景趣は、さながら天使が天下つたかのやうである。昔から、年の始に超板戯の音を立てると、悪鬼アクキが逃げてしまふと言はれてゐる。

それとは別に、男の子は、水の張つた上で、パンイの勝負を争つてゐる。パンイといふのは、



超板戯

内地のそれ

で勢がついたところ

内地のそれよりも一層原始的な形の一種の獨樂である。木で作つて、砲弾の上半部を切落したやうな形で、軸がない。最



初手で廻しつけて、それを鞭の先に附けた革紐カシマか、細いテープやうの物で側面を打ちながら、勢を強めるのである。すつかり勢がついたところ

で、敵のとかち合せて勝負を決める。その方法は、内地の子供のするのと變りはない。由來玩具の少い朝鮮では、これが何よりの遊とされてゐる。以前には男の子は總角チヨンガクと言はれて

三つ打ちにした長髪に赤いリボンを附けてゐたものであるが、今では切落して散髪にし、草鞋を脱いでゴム靴に履きかへ、チッキを上衣の上に著て、すつかり現代風に變つてゐる。その子供が氷の上ばかりでなく、床の上でも、地面でも、群がつてこのパンイをしてゐるのを見受ける。

一三 白い國朝鮮 その二

正月には、朝鮮の大衆遊戯に索引つばひといふ行事がある。陰曆の十五、十六日の月夜を徹して勝負を競ふのであるが、これも朝鮮らしい遊戯で、しかも年中行事の随一とされてゐる。田舎町でも、直徑一メートルくらゐの繩を作る事は珍しく

ない。常に邑内を東西の二つに別けて置き、それによつて勝負を競ふのである。正月になると、幾日も前から繩を集め、稟の寄附を受けて、大繩を作り上げる。愈、その日になると、出來上つた綱が競技場に運ばれる。東軍は東、西軍は西といった風に、各の居住地の位置に分れて陣を取り、司令の作戰の下に行動する。東軍の綱の端に太い丸太をしつらへ、丁字形にして西軍の綱の先に丸く作つた輪にひつかける。ひつかけるにも技巧があるが、その引き方にも、また腰をおろして持久戦を續けるにも、それ〴〵骨こがあつてむづかしい。その日は何所も家を空にして皆出拂ふ。老若男女、一村落の全部を舉げて力を争ふところに興味がある。しかもこの索引に勝

全部を舉げて

てば、邑内の一年中の行事に常に先を制し、さては農作物までが豊作になると迷信されてゐる。今ではその地方に住んでゐる内地人までが一緒になつて、勝負に力を入れてゐる。その陸まじい光景はいかにも氣持よく眺められる。

どらを合圖にすべての行動が開始される。徹宵して勝負がつかなければ、翌晩になつてまた續ける。愈、勝負が決ると、勝つた方は有頂天になつて踊り狂ふ。假裝行列をするやら、敵をからかふ唄を歌ふやら、敵身方の別ちなく各の陣地、邑内を練歩く。こゝに感心な事は、敗軍の將は兵を語らずといつた形で、負けた方の邑民は、どんなに笑はれても嘲けられ、ても、一言の應酬もしない。守るべき秩序はあくまでも整然

どら(銅鑼)

：…するやら…
歌ふやら

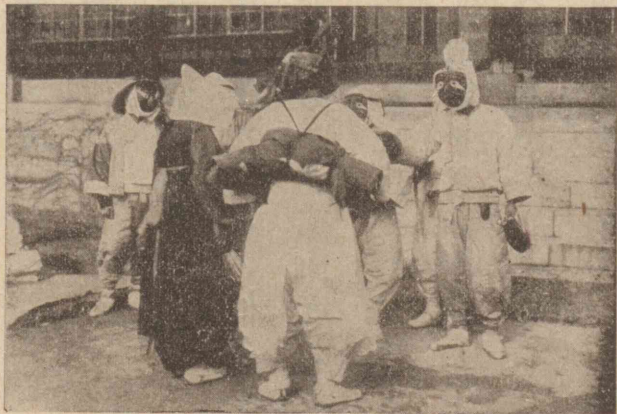
敗軍の將は云々
吳越春秋に「范蠡曰ク臣聞ク亡國ノ臣ハ敗ヘテ政ヲ語ラズ、敗軍ノ將ハ敢ヘテ勇ヲ語ラズ」とある。
守るべき秩序

と守られてゐる。實に見上げたものである。民衆競技として、ちよつと内地では見られない行事である。

古來文獻に乏しい朝鮮には、文學的傳承はまことに少いが、神話傳説に見る日本とのつながりには、殊に親密なものがある。羽衣傳説、松山鏡、瘤取、姨捨山傳説など、その他多くの我が國の昔話は、確かに朝鮮に由來があり、支那、印度から承けて我が内地への橋渡しの役割を務めた跡が、はつきりうかゞはれる。それにもまして勝れた遺品を數多く存してゐるのは美術である。平壤附近の樂浪の美術、扶餘に於ける百濟の美術、慶州を中心とする新羅の美術、高麗朝の美術、李朝の美術など、見るべきものが澤山ある。

樂浪 漢の武帝が衛滿の朝鮮を滅して直轄領土とし、四郡を置いた。その一、樂浪郡は、大同一江の左岸にあり、里村に多量の漢代美から遺物が見られる。
扶餘 忠清南道の南部にあつて百濟の舊都。今此所に墳墓、石塔等が残つてゐる。
慶州 慶尙北道の南部。此所の古墳からは豪華な服飾品が発掘される。

演劇に就いて見ても、古いものでは、タルツと呼ばれた假面劇を見ると、或時代のこの國の生活相が目の前に浮ぶやうである。元來一種の惡鬼除けの行事から變化して、貴人の宴席の餘興に行はれた、我が壬生狂言めいた默劇である。題材は兩班の強慾を諷し、當時の僧尼の腐敗を戒めたもので、さながら高麗の民風を存してゐる。今も民間に、「一番怖いものは何か」と問ふと、立所に「虎に乗つた兩班」と答へる習慣がある。



(ツルタ) 劇面假のけ除鬼惡

壬生狂言
京都の壬生寺で三月十四日から二十四日まで行はれる假面をつけた無言劇。
兩班
朝鮮の士族で、今も田舎では勢力がある。

るが、右の劇の筋と思ひ合せて、民族的にも根柢のある言葉である。

朝鮮に分布されてゐる動物中、虎が一番怖いものとなつてゐる。虎の傳説を見てもなか／＼多く、今でも山奥に入ると、牛や馬に鈴を澤山付けて、騒がしい音をたてながら歩いたり、夜になると松明を照し、時々大聲を擧げたりする習慣になつてゐる。しかし一方では、猛獸崇拜の遺風から、虎を「山君子」「山中の英雄」などといふ異名に呼んで、ひたすら崇めるといふ風習もある程である。

朝鮮と虎とは、加藤清正の物語からしても、切離しがたいものである。

…たり…たりする

紀元以前
神武天皇の御即位式以前。

植林
樹を植ゑて林をつくること。

熊野
今の和歌山縣東、西牟婁郡の總稱。

歸化

こゝでは日本の國の臣民となること。

蕃殖
ふるること。

豪族
勢力の強い家びら。

自修文

古代に於ける日鮮の關係

日本と朝鮮とは大昔から深い關係をもつてゐて、古く紀元以前に日本から渡航した人もあれば、朝鮮から日本へ渡つた人も少くない。天照大神の御弟の素戔鳴尊は、その御子五十猛神いだけるのかみをつれて新羅へ渡り、木の苗を持歸つて、紀伊國やその外の内地に植林した。中にも熊野附近が最も樹木に適したので、木の國といふ名も附いたといふ。

次に向ふから日本へ來た者では、新羅の王子と稱する天日槍あめのつゆといふのが一番古いと傳へられてゐる。これは素戔鳴尊の御子の大國主神が、出雲地方を治めてをられた時に渡海して來て、その勢力に屈服し、遂に歸化きくわして但馬に住居したもので、子孫が蕃殖はんしよくして、その地の豪族となつた。神功皇后の御母方は天日槍の子

韓人
三韓の人。

半島

朝鮮半島のこと。

保護國
かばひ護つてゐる國。

孫である。故に神功皇后は御事業の上に何かと御便宜ごべんぎを得られた事であらう。また大國主神が出雲地方を治めてをられた時に、朝鮮の南端を日本に引寄せたといふ傳説がある。即ち國來い、國來い。と言つて引寄せて、それを出雲に縫附けたと言つてゐるが、實際は韓人を多く日本へ移させて、植民した事實と見るのが至當であらう。

神功皇后の征服以後約四百五十年に互つて、半島を保護國としてゐた間、雙方の往來交通は頻繁で、戦争もたび／＼あり、平和な貿易も盛んにあつたから、この四百五十年間が、古代に於ける日本と朝鮮との密接な關係のあつた時期で、當時日本では土地の割合に人口が少かつたから、移民を歓迎したので、盛んに朝鮮から移民を引寄せた。これ等の人の中には、農民も職工もあつたらうが、機織はたおひを業としてゐたのが一番多かつた。絹織物がこの後

轉住
他へ移り住むこと。
純朝鮮人
他から朝鮮に來たものでなく、純粹の朝鮮人。

桓武天皇
第五十代。
欽明天皇
第二十九代。
調伊企儼
敵將が捕へられた時、
敵將が「日本王わがしりをくらへ」と呼ばせようとする、反對に「新羅王わがしりをくらへ」と呼んで、遂に殺された。

漢人種
支那の黃河流域に發達して來た人種。

領巾
昔婦人が正装の時、頭にかけて飾とした布。

遙拜
はるかにをがむこと。
最期
命の終。死。
義烈
義心のすぐれてゐること。

日本に發達したのは、この移住民の力である。これ等の人々はもとく、支那人で、朝鮮に移住し、それからまた日本へ轉住した者であるが、純朝鮮人の移住したのも決して少くはなかつた。そしてこの人々は男女で移住したから、韓の婦人も當時澤山に來たであらう。また日本人で朝鮮に移住したのも少くないから、自然内地にも、朝鮮にも雜種の子の殖えた事は言ふまでもあるまい。

今でも日本人中に朝鮮式の顔が多少あるのは、この系統をひいてゐるのであらう。蝦夷征伐で有名な坂上田村麿や、その子の坂上田村麿なども歸化人で、しかも桓武天皇の大功臣となつたのである。それより古く欽明天皇の時に、新羅征伐に出て敗軍し、新羅に捕へられた時、敵の大將を罵つて殺されたといふ豪氣な調伊企儼といふ武

人なども、先祖は應神天皇の時朝鮮から來た漢人種である。この時、伊企儼の妻の大葉子も捕虜となつたが、この大葉子を詠んだ歌に、

韓國の城の邊に立ちて大葉子は

領巾振らすもやまとへ向きて

といふ有名な歌がある。この歌は、大葉子が夫と同じく敵の前でわるびれもせず、城の上から日本の方を向いて領巾を振つて、最後の遙拜をした後、勇烈な最期を遂げたのを見て、日本人の感じて詠んだものである。この時、伊企儼の子も父と共に戦死をした。夫婦親子うちそろつての義烈は、目覺しい事であるが、やはりこれも韓國人の血統である。

また當時は婦人も勇悍で、夫と共に從軍する者のあつた事に注意せねばならぬ。獨り大葉子のみでなく、夫と共に遠征に從軍

希有 ごく珍しいこと。めつたにないこと。
 上毛野形名 第三十四代舒明天皇の時の人。蝦夷を討つて敗れ、圍まされて逃れようとした時、妻に勵まされて遂に蝦夷を平げる事を得た。
 行基 奈良時代の高僧。諸國を巡つて寺を建て、道を開き、橋をかけたなどして大功があつた。
 菅野真道 續日本紀といふ書を作つた人。光仁、桓武二朝に仕へた。弘仁年中(一四七〇—一四八三年)歿、年七十四。
 萩野由之 歴史家。文學博士。新潟縣の人。大正五年歿、年六十五。
 徳富健次郎 小説家。蘆花と號した。熊本縣の人。昭和二年歿、年六十。

したのは希有な事ではない。當時はこの外にも澤山例があつた。上毛野形名の妻などもその一人である。また佛教で有名な行基菩薩も歸化人の血統であるし、建武中興の忠臣兒島高德も、もとを尋ねればまた同様である。學者では菅野真道も百濟人の血を分けた者、周防の大名の大内氏なども任那人の子孫であるから、朝鮮人でも長く日本の感化に浴すれば、りつばな臣民となる事は、明らかなる事である。

(萩野由之の文に據る)

一四夕立

徳富 健次郎

今日早めに夕飯を食べて庭に出てみると、北からひいや

こんもりとした

かし(檜)

埋伏してゐた……
雲が



徳富健次郎

りと風が來た。眼を上げると、果して北に一團紺青色の雲が立つてゐる。その紺青の雲を背にして、こんもりとした隣家の杉や、かしの木立、孟宗竹の藪などが生々しい緑を浮してゐる。

「夕立が來るぞ。」

主人は大聲に呼んで、手早く庭の干物や履物などを片付ける。裏庭では婢が駈けて來て、洗

濯物を取入れた。

やがて食卓から立つて妻子がおりて來た頃には、北天の一隅に埋伏してゐた、かの濃い紺青色の雲が、忽ちにむらむ

三人は……見た

あな夥しの雲

默示録

ヨハネ默示録。キリスト教經典の新約聖書中の一篇。その青空をすら餘さじものを……

らと湧起つて、何の艶もない濁つた煙色になり、見る／＼天穹をはひ上り、大軍の散開するやうに、東に、西に、天心に、ずゝうつと廣がつて來た。三人は芝生に立つて、驚歎の眼を見張つて、この夥しい雨雲の活動を見た。

あな夥しの雲の勢や。默示録に、天は卷物を卷くが如く去行く。と歌つたも無理はない。青空は今南の一軸に捲きぢぢめられ、煤煙の色をした雲の大軍は、その青空をすら餘さじものをと、南をさしてひた押しに押寄せてゐる。つい今し方まで雨をこひしがつてゐた乾ききつた眞夏の喘は、何所へ行つたか、たゞ十分か十五分のうちに、大地は恐しい雨雲の下に閉籠められて、冷い暗い冥府になつた。

驚かす
音響を聞かぬが

……を感じつゝ、
離し得なかつた

雲の運動は秒一秒激しくなつた。南を指して流れる雲、渦巻く雲、眞黒に屯つて動かぬ雲、雲の中から生れる雲、雲を摩つて移り行く雲、濃くなり淡くなり、淡くなり濃くなり、北から東へ、東から西へ、北から西へ、西から南へ、逆流して南から東へ、世界中の煙突といふ煙突を此所に集めて、煤煙の限りなく湧くやうに、眼を驚かす雲の大行軍、音響を聞かぬが不思議である。

冷い風がすうつ／＼と顔にあたる。後馳せに雷がそろそろ鳴り出した。北の方で條をなさぬ紅や紫の電光が、時々ばつばつと天の半壁を照して閃く。近附く雷雨を感じつゝ、我等はなほ頭上の雲から眼を離し得なかつた。薄汚い煤煙色

どの一寸四方とし

をした満天の雲は、益、南へ流れた、水のやうに、霧のやうに、煙のやうに。空は皆動いてゐる。闊い空のどの一寸四方として動いてゐないものはない。草木も人も息を潜めたかのやうに、一切の物音ははたと絶えた。

空はたうとう雲をかぶつてしまつた。著しく水氣を含んだ北風が、ぱつぱつと顔を打つて來た。やがて粒だつた雨になる。雷も頭上近くなつた。母屋の南面の雨戸だけ残して、悉く戸を締めた。暗いのでランプをつけた。

ざあつと降出した。雷が鳴る。一庭の雨脚を凄じく見せてぴかりと電が光る。ざあざあとと激しく降出した。

見る／＼庭は川になる。雨が飛石を打つて跳はな反る。目に入

ふるはして

る限りの青葉が、一葉々々に雨を浴びて、嬉しさうにぞくぞく身をふるはしてゐる。

「あゝ、いゝおシメ濕りだ。」

と誰か言ふ。

「まだ七時だよ、まあ。」

妻と婢との驚いた聲がする。

夕立から本降になつて、雨は夜すがら降つた。

(みゝずのはこと)

黒田初子
登山家。明治三十
六年東京市に生れ
た。

一五 高原を想ふ

黒田 初子

高原といふのはどんな所を言ふのかしらと改まつて考

答へられる

へて見る時に、さてこのやうな所でございませうと答へられるやうな、ちやんと纏つた概念を持つてゐない私ではあるが、たゞ高原といふ言葉を口にしたり、耳にしたりする時の、あの和やかな、ほゝゑましい氣持や、のびやかな線や、色合などをひつくるめて、私は自分一人で作り上げた夢のやうな高原を、頭に描き出す事が出来るのである。

その景色といふのは、廣い／＼平な野原で、鳥の胸毛のやうに軟かい短い緑草でおほはれてゐる。その野の果の線は、蒼い空をくつきりと界してゐて、遙か高い彼方には、形のいい山々が重なり連なつて浮上つてゐるやうに見える。また原の中程の所には、白かばの樹が數本立つてゐて、樹の姿は

ほゝゑましい

おほはれて

かば(樺)

ほんたうに瀟洒だ。

緑草の上に投出してゐるこの樹の影まで氣が利いて、ちよつと斜になつてゐる。淺緑の小さな無数の草の間から、太陽の光は細かに／＼分れて通つて來る。夢の中の自分はふと、甘い匂に心をひかれ放心したやうに横たはつてゐた身體を心持動かして、匂の來る方に目をやると、葉の下に恥づかしさうに花を附けた鈴蘭が一群をなしてゐるのに氣が附く。

花の好きな私は、もうすつかりはしやいでしまつて、大人といふ衣を脱捨て、しごき姿の子供になつてその鈴蘭を摘取る。

見てちやうだい
何時の間にやら

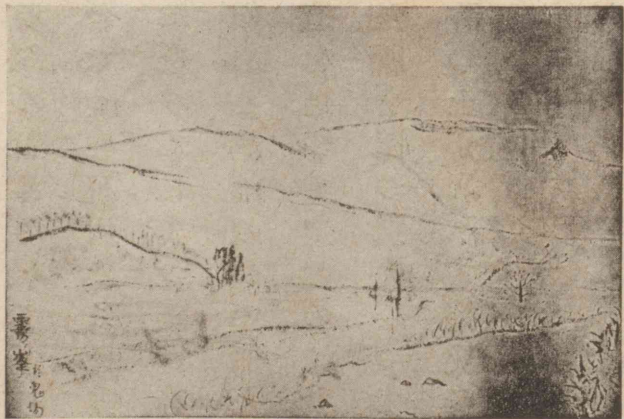
餘り一所懸命で、花より外には目をくれない。摘んだ花が左手に持ちきれなくなつてからは、胸を押當てて助とした。花束が大きくなつたので、葉を數枚取つて取圍み、やつと眼を上げて、「この花を見てちやうだい」とつれの人を見返れば、何時の間にやら、花を追つて歩いてゐた自分はつれにはぐれて、一人ぼつちになつてゐた。淋しいけれど仕方がない。一人で花束を抱へて寝てゐると、牛や馬が遠くの方を散歩してゐる。それがだん／＼に近附いて來て、不思議さうに此方を見ながらうろ／＼してゐる。ちよつと恐しいやうな氣がするが、逃げる氣もしない。牛も張合なささうに向ふへ行つてしまふ。

なきさうに

霧ヶ峯高原
長野縣諏訪郡上諏訪町
の東北方。海拔一六〇〇メートル。
美ヶ原
松本市の東、茶臼山の北。海拔一四〇〇メートル。
念場ヶ原
甲斐と信濃の國境八ヶ嶽の東麓。
戰場ヶ原
栃木縣日光中禪寺湖の北方。赤沼ヶ原ともいふ。

何所かで「かつこう／＼」と鳥が鳴いてゐる。それが自分を呼んでゐるやうに聞えて仕方がない。

こんな夢のやうな高原といふものを憶ひ出すのは、自分が曾て遊んだ霧ヶ峯美ヶ原、念場ヶ原、さては日光の戰場ヶ原などの記憶や、高原の名畫や寫眞から受けた感激などが、石鹼玉のやうな虹色を出す美しい一つの塊となつて、私の頭の中にしまひこまれてゐるからなのであらう。



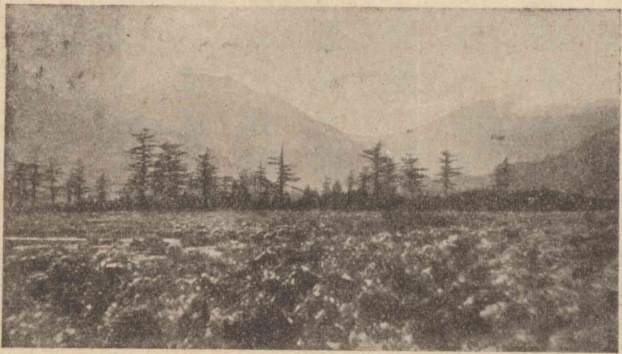
霧ヶ峯 (筆夫正田黒)

雑司ヶ谷
東京市豊島區。

久世山
東京市小石川區。

あこがれ(憧)

思へた



私は小さい時から原が好きで、お墓詣の歸りに雑司ヶ谷あ
たりの原を歩くのがどんなに嬉しい
事だつたか。今では小石川の久世山も
文化住宅地になつてしまつたが、其所
は小さい頃のあこがれの高い原だつ
た。母たちが道を廻つて登るのに、私は
崖崩れのした所を四つ這になつて登
原つた。時々足許の土が崩れて押戻され
たり、清水がにじみ出るので足を
滑らせたりしながらも登りつけば、頂
上は子供心には廣い——原と思へた。ねこじやらしとかい

生えて

とんぼ(蜻蛉)

どんなに恨めしく
聞いた事だつたら

ふ稲に似た草が一面に生えてゐて、その中にほたる草や水
引の花が隠れてゐた。男の子たち
はとんぼを追ひ、私は花を摘み、「も
う歸りませう。」と言ふ母の聲をど
んなに恨めしく聞いた事だつた
らう。

「いやなお天道様ね。もつとゆつ
くり歩けばいゝのに。」

と、落ちて行く太陽を睨み附けた
事もあつた。

日曜などには弟をつれて、戸山ヶ原に遊びに行つた。春には



原 美

戸山ヶ原
東京市淀橋區。

すみれ(堇)
つくしんぼ(土筆)
すゝき(薄、芒)
いなご(蝗)

秩父
埼玉縣の西境一帯
をいふ。
金峯山
山梨縣の北境。海
抜二五九五メートル

望まれる

あく事

すみれやつくしんぼが澤山取れたし、秋にはすゝきや野菊が綺麗だつた。いなごを捉へて紙の袋に入れ、がさくいふのを氣にしなから、我が家へ歸る道の楽しさは今でも忘れられない。

かうした私が初めて山といふものを知つたのは、秩父の金峯山であつた。知つたといふのはをこがましい話で、たゞ山の頂上に立つたといふに過ぎないが、その時から、遠くに望まれるいづれの山にも一度は登らずにはをられないと思つた。さうして、これ等の山に登れば、また他の山が望まれるではないか。あく事を知らない慾深さで、無理だと言はれる山路にも幾たびか入つて見た。登りにくいと聞けば聞く

程攀ぢてみたくなる心を抑へかねて、岩や雪の峯々にも近附いて行く自分であつた。しかし或時には、武装を解いて村から村へ通ずる峠とか、高原のやうな所へも行きたくなつた。ちやうど試験勉強の後で、故郷の優しい母の懷を懷かしむ娘のやうに。

それは大抵春の終から夏の初にかけてであつて、高い山の雪も溶け始め、半歳に互る冬季登山に別れを告げた時である。そこで軽い荷物で、氣輕に何所か高原へ行つて見たいと思ふのだ。草の上に坐し、冬には張切つて向つて行つたアルプスの山々を望むのは、何といふ嬉しい事だらう。嬉しいばかりでなく、何かしら山とか人生とかいふものに就いて

アルプス
日本アルプスの略稱。本州中部地方の山脈一帯をいふ。

何かしら

思へてならない

考へさせられるのだ。険しい山に直面してゐる時は、身體に
餘裕の少い爲か、心は登る事に集中され易い。しかし、高原を
歩いてゐる時は、ゆつたりと山を想ふ事が出来るやうに思
へてならない。

牛山充
音楽評論家。明治
十七年長野縣に生
れた。本文は特に
本書の爲に新作り
したもの。

ベートーベン
ドイツの有名な作
曲家。(西紀一七七
〇—一八二七年)

一六 ベートーベンの話 その一 牛山 充

あなた方は、大抵、月光奏鳴曲をお聞きになつたでせう。中
にはこの曲の由來に就いて、傳説めいた靴屋の盲目娘の物
語をお讀みになつた方があるかも知れません。言ふまでも
なく、これは架空の物語で、事實に基づいたものではありま
せんが、この曲を作つたベートーベンが、極めて同情心に富

信じられる

ウエリントン
イギリスの元帥、
政治家。ナポレ
オンを打ち倒し
た。破つて公爵
になつた。(西紀
一八〇一—一八
四五二年)

ナポレオン
フランスの皇帝。
フランス革命の時
あり、帝位に上つ
た。(西紀一七六
九—一八二一年)

ボン
ドイツの都府。ラ
イン河畔にある。

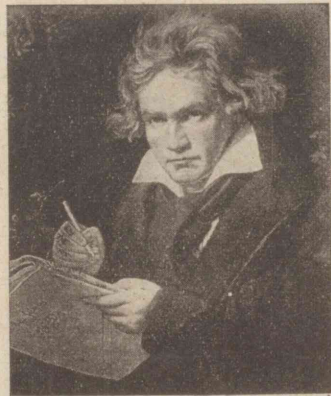
んだ温かい心の人で、氣の毒な人たちの爲にいろ／＼と慈
善的な仕事をしたからこそ、あのやうな美しい物語が生れ、
遂には多くの人々に、實話として信じられるやうになつた
のです。

ベートーベンは十八世紀の生んだ屈指の人傑で、同じ時
代の英雄ウエリントンは言ふまでもなく、ナポレオンよりも
偉大であると言はれる人です。随つて、音楽家のうちで
は空前絶後の樂聖であらうと考へられてゐます。では何故
さうであるか、そのわけを少しお話いたしませう。

ベートーベンは七人兄弟の二番目として生れたのです
が、男では長男でした。父はボン選挙侯に仕へてゐたテナ

月光奏鳴曲
に
かんする
んせつに
て

一 歌手で酒癖が悪く、わづかばかりの収入は悉く酒の爲に浪費して家を顧みませんでしたので、病弱で優しい母の心労は非常なものでした。ベートーベン（の）は十一の時から劇場に出て働き、母を助けて弟妹の世話をしました。十七歳の時母は病の爲に長逝したので、家長の代りとなつて、一家の爲に小さい胸を痛めなければなりません。天才の永く



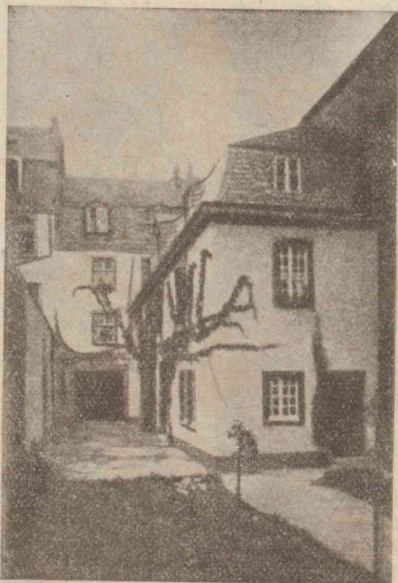
ンベートーベ
(の)中筆執撒彌殿莊

雄飛すべき天才

ウィーン
ある。オーストリアの首府。

故郷のボンは片田舎の町で、将来雄飛すべき天才の永くとまらるべき所ではありません。大いに仕事をしようとする者は、どうしてもウィーンへ出なければなりません。ベートーベンも意を決して、二人の弟を伴つてこの都へ上り、父母に代つて深切に愛育しました。

母に對して至孝、弟に對して至友であつた。ベートーベンが朋友に對しても終生かはらない誼を保つた事は言ふまでもありません。ノールが編纂したベートーベンの書簡集を繙く人は、臨終に於てもなほボン時代の舊友ベーゲラー夫妻などに對して、溢れるばかりの友愛をもつてゐた事を知るであります。



家生のンベートーベ

親しく交つた

ノール
ドイツの評論家、
詩人。ベートーベン
ン研究家として名
高い。西紀一八三
一―一八八五年

原稿の
つめて
うをな
さりの
ちくの
を
なほ...もつてゐた

人は成功すると、自分一人の利益をはかるのが普通ですが、ベートーベンには世に出る抑の初から慈善音樂會に出演し、成功の頂上に立つても、絶えず貧しい人々の爲に力を盡すのを喜としました。一八〇一年にウーインからボンの舊友ベーゲラーの許に寄せた手紙には、次のやうな事が記されてゐます、

「……まあこゝに困つてゐる友人があるとする。ところで私の財布がすぐこの友人を助ける事が出来ない場合には、ちよつと自分の机に向ひさへすればよいのです。さうすると、瞬く間にその困窮を救つてやる事が出来ます。……これが出来るといふ事は何たる喜でせう。……私の藝術は貧しい人々を救ふ以外の目的に獻ぜられてゐるものではありません。」

何たる
向ひさへすればよいのです

前略

成人

技術
音楽

グラーツ
オーストリア東南部の都會。
あいにく……なかつた

バーデン
ドイツの西南、フランスとの國境。

カルルスバード
ボヘミア州の都。温泉地として名高い。

一八一二年グラーツで慈善音樂會が開かれ、ベートーベンも應分の助力を求められたのですが、あいにく送るべき金がなかつたので、他の原稿に添へて「橄欖山」と「合唱幻想曲」との樂譜を送り、何と言つても代價を受取らうとはしませんでした。それから間もなく、バーデンの大火で罹災した者の慘狀を正視するに忍びず、自ら率先してカルルスバードで盛んな慈善音樂會を開きました。

既に友人に對し、また苦しんでゐる同胞に對し、溢れるばかりの同情をもつてゐたベートーベンが、祖國に對して無

關心であつたはずはありません。一八一三年の秋、ビットリヤの役に於ける佛軍の敗報が傳へられるや、ハナウで負傷したオーストリアとバイエルンとの兵士たちの爲に、音樂會を指揮しました。この時はたゞ指揮者として立つたばかりでなく、なほ特に「ウエリントンの勝利」別名「ビットリヤの役」を作曲しました。この時は、當時知名の音樂家が十數名もオーケストラの中に加つて演奏したので、音樂史上でも名高いものですが、ベートーベンも作品が自分のものであつたから指揮者となつたので、若し他人の作であつたならば、喜んで大太鼓でも何でも引受けるところであつた。我々の頭には、ただ祖國に盡したいとの一念があるだけで、誰一人としてお

特に作曲しました。
オーケストラ
(管絃樂)

互の地位や伎倆の上下を考へてゐる者はなかつた。と書いてをります。

一七 ベートーベンの話 その二

ベートーベンはバイオリンも達者でしたが、ピアノは殊に名手の域に達してゐました。初めウィーンへ出た頃は主としてこの演奏で立ち、また多くの弟子を教へて生活してゐました。弟子に對してもよい先生であつたのですが、殊にツェルニーには非常に深切にして美談さへ残つてゐるくらいであります。

しかし權門富貴に媚びる事は大嫌ひでした。それにも拘

ツェルニー
オーストリアのピ
アニスト、作曲家、
音樂教育家。西紀
一七九一—一八五
七年。

Handwritten notes in German:
...
...
...

天才と……人となりとに……

らず、王侯貴族が争つてこの樂聖を迎へたのは、全くその不出世の天才と至純な人となりとに心服してゐたからであります。

一時イタリー音樂熱がこの都を風靡し、堅實な音樂が顧みられなかつた事があります。ベートーベンベートーベンは時運の非なるを見、苦心の大作を携へて他國へ去らうとしました。これを傳へ聞いたウィーンの貴族や出版業者は非常に驚き、連名してこれを思ひとゞまる事を請ひ、一定の年金を支出する事を申し出たくらゐです。彼等はこの樂聖を國の寶であると考へ、またこれを言葉にしてゐます。

尊重するところとなつた

かくまで世の尊重するところとなつたのですから、さぞ

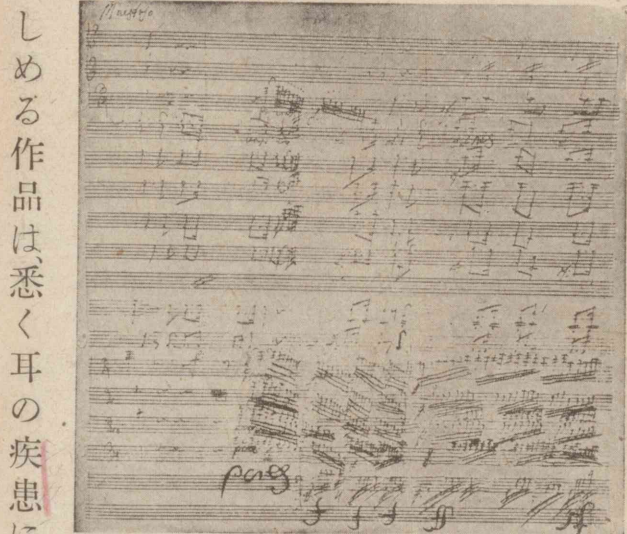
フンサイ

強ければ強い程

幸福であつたらうとは誰しも考へるところですが、事實はまさに反對で、壯年時代から聾の徵候が現れ、醫者の不熟練の結果遂に不治の病となつて、全く聽覺を失ふやうになつたのですが、これを人に知られる事を恐れたので、その苦惱は非常なものでした。この間の消息は、知人に宛てた書簡によつて明らかですが、何人も涙なしにこれを讀む事は出來ないくらゐであります。

大抵の人はこの爲に粉碎されて、創作を續ける事は到底出來なかつたでせう。けれども、打撃が強ければ強い程、反撥して起ちあがりました。運命の殘酷な鐵槌は幾たびもベートーベンをうち倒したやうに見えました。しかし、そのたび

ごとに猛烈と奮ひ起つて、次から次へと大作を投出したのであります。



譜樂の筆目ンベートルーベ
(曲樂響交九第)

あなた方はシルレルの歡喜の頌に作曲した合唱の附いてゐる第九交響曲と、莊嚴彌撒とを聞かれたでせう。この二曲はいづれも空前の傑作と稱せられるものですが、これ等をはじめ樂聖の名を不朽ならしめる作品は、悉く耳の疾患にかゝつてから、絶大な苦惱と

シルレル
ドイツの劇作家、
詩人。(西紀一七五
九—一八〇五年)

莊嚴彌撒
ベートーベン晩年
の代表作。彌撒
とはカトリック教
會で儀式中に奏せ
られる音樂。

不朽ならしめる

昔と今

うきかへて
したかへる
こと

精神と勇氣と
があつたから

ねばりがい
なふつこい
執拗

戦ひつゝ書上げたものであります。

よく言はれる事ですが、音を生命とするので、人一倍完全な聽覺を必要とする音樂家が、全くこれを失つて、しかもよくこの偉業を成就し得た事は、古今東西の歴史にその比を見ない驚歎事であります。もとより生れつきの樂才がなく、ては出來得べき事ではありませんが、その上に、不屈不撓の精神と不退轉の勇氣とがあつたからこそ、これが出來たのです。

百萬の敵を征服する事も容易ではありません。しかし、一人寂しく自己の執拗な運命と戦ひ續けて、遂にこれを克服し、全人類の喜となり誇となるべき作品を生み出した勝利

遺憾せしめるに足

ふるひるこ
かすこと

に比べたならば、難易の懸隔は同日の談ではないのであり
ます。ナポレオンの最大の勝利も、その當時こそ一世を震撼
せしめるに足る威力と華やかさをもつて輝いたでせう
が、これをベートーベンの收めた超人的の勝利が、年を閱す
るに随つて益、光輝を加へるのに比較する事は出来ないの
です。

この偉大な魂が天に去つてから、百年は夢のやうに流れ
ました。その傳記はあらゆる方面から精査し盡されたにも
拘らず、操行上一つの非難すべき點も見出されません。その
生涯の足跡をたどり、その人となりを明らかにすればする
程、その作品が強く人心を動かす所以が明瞭になつて來ま

明らかにすればす
る程

成就せしめた

勉強してお出でな
らば

す。自分を棄てて全人類の爲に、それも未來のよりよき人類
の爲に、自己の藝術を通じて盡さうとした獻身的努力が、あ
の偉業を成就せしめたのです。

あなた方のうちには、多分ピアノを學んでをられる方が
あるでせう。若し「ツェルニーの練習曲」を勉強してお出でなら
ば、あなた方はベートーベンの孫弟子となつたのです。若し
「ツェルニー」は卒業して、この樂聖の手になつた「ピアノ奏鳴曲」
を學んでをられるならば、或意味に於て、直接にこの大家の
教を受けてゐると言ふ事が出來ます。たとひ自身ではこれ
を弾かないでも、その演奏に接して心からの感動を覺えた
ならば、既にこの樂聖と靈交を結び得たのであります。

安井哲子
教育家。東京女子
大學校長。明治三
年千葉縣に生れた。

かまぐらうで
あつた未知
の農人と會

あいさつ(挨拶)

一砂即
質朴な
田舎人

一八 交際

安井哲子

鎌倉滞在中の事でした、或朝友人と一緒に電車を待合せ
てをりますと、そこへ一人の農夫らしい旅人が來合せまし
た。質朴な田舎人の習として、うち解顔に「お早うございませ」と
あいさつしました。そこで私が「鎌倉の御見物ですか」と聞き
ますと、「さやうでございませ」と答へ、「昨日は實に面白うござ
いました」と言つて、いろ／＼話し続けました。私はその時、こ
の人は話相手がなくてさぞ寂しいだらうと、同情しないで
はをられませんでした。

私どもは美しい景色を見た時に「あゝ美しい」と感じただ

感じを分けるか：
：詠ずるか：書
表すか：しなれば

人類は
社交的動物である

コウゼツ

けでは満足が出来ず、傍の人にその感じを分けるか、または
これを詩歌に詠ずるか、文章に書表すかしなければ気がす
みません。それ故旅行などには趣味を同じうする道連があ
ると非常に愉快ですが、若し一人の場合には、機會のあるご
とに自然、周圍に話相手を求めるやうになります。これは、人
類が社交的動物であるからです。

社交は單純な群居生活とは違ひます。私どもは數百人に
圍まれてをりましたも、心寂しく感ずる事があります。互に
うち解け合ひ、互に同情し合ひ、互に興味を分け合つてこそ、
はじめて心の満足を感ずるのです。

世には交際の巧拙を説き、交際上の禮儀作法を説く人が

かやう(斯様)

……にとまづて

感じさせる

三社交とは

氣易く感心

(X) social

ある

勝つては

感じられる

あります。勿論それは心得として必要な事です。けれども一面には、かやうな禮儀作法の生ずる精神を深く考へなければなりません。精神のない禮は虚禮であつて、たゞ相手を窮屈がらせるにとまづて、何の愉快も伴なひません。交際の秘訣は、まづ他人に氣易く感じさせる事です。そしてさう感じさせるのには、まづ他人に對して疑心を懷かず、また己を飾らず、胸襟をうち開いて親しく接する事です。うち解けない人ほど交りにくいものはなく、己を飾る人程うち解けがたいものはありません。
英國の婦人は一般にお世辭に乏しくて、愛敬がありませんが、話してをうて何となく愉快に感じられるのは、飾氣がないのと、同情が深くてまことにたのもしからとの爲です。それ故、茶の會や食事の會などに招かれても、飲食物の結構な事よりも、其所に集つて來た人々とうち解けて話し合ふのが、非常に面白いのです。

餘り多言すると、相手に不愉快を感じさせますが、さりとして、口をつぐんで相應のあいさつをしないのも、また餘りほむべき事ではありません。また全く口にお世辭ばかり並べて、心の中には少しも相手の事を考へない交際家と稱せられる婦人もありますが、さういふ人は、それで自分の不誠實を表すといふ事に氣附かないのでせうが、私どもは、求めてそんな交際家となる必要はありません。たゞ誠意を以て相

つぐむ(喋)
ほむべき事

五作方にか
ふ交際とは
六吾々の本性
と社交

學校でも社會でも

シヤク

今でも

手に接し、且深く同情さへすれば、自然に適當な事も出來、作法にも適ふやうになります。社交的の性質を備へてゐる私ども人類は、他人と共に親しく生活する事がその本性を満足させる所以ですから、家庭内では勿論學校でも社會でも、まづ胸襟をうち開いて、心置きなく交る事が肝要です。しかし、うち解けると言つても、決して誰彼の差別なく、一切無頓著に、心の祕密までもうち明けるといふ事ではありません。つまり、相手を心易く感じさせる事です。古諺に「旅は道連、世は情」とは、よく言つたものです。

私は今でも鎌倉の旅人の事を忘れる事が出來ません。

一九 風 鈴 (童謡)

一 風 鈴

川 路 柳 虹

川路柳虹
詩人、美術評論家。
名は誠。明治二十
一年東京市に生れ
た。

風鈴ちりちり鳴りました、

赤ちやんすやすや睡ねましたよ。

風鈴ちりちり鳴りました、

赤ちやんにつこと笑ひます。

夢のなかでも風吹いて

風鈴ちりちり鳴つたでせう。

野口雨情
詩人。名は英吉。
明治十五年茨城縣
に生れた。

二 夜明け鳥

カホカホ鳴くのは
明け鳥

野口雨情

鳥
夜を明かす

もう夜が明ける、
夜が明ける。

夜明けの海には星一つ。
お山の上にも星一つ。

夜明けのお星は
もう見えぬ。

夜明けには

もう夜が明ける、
夜が明ける。

夜明けにや夜明けの明け鳥
カホカホ鳴くから夜があける。

沼田頼輔
考古學者。文學博
士。神奈川県の人。
昭和九年歿。年六
十九。

二〇 紋 所 その一

沼田頼輔

我が國では、家があれば苗字があり、苗字があれば必ず紋
所があります。近頃は白襟黒紋附とも申すくらゐで、禮服に
は必ず紋所を附ける事になつてをりますが、さてその紋所

我が國の紋章は、始つたもので、

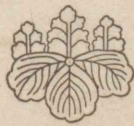
總角 鎧の逆板に著ける揚巻結の總角の具、膝を被ふもの。

に關する知識はと言ふと由來は勿論名前さへ知られてゐない場合が澤山あります。

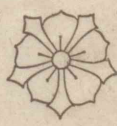
我が國の紋章は本來、武家時代に或標章を旗や幕の目印として使つたのに始つたもので、その結果、武張つた意味を含む紋章が非常に多いのであります。例へば、劍酢漿草劍葵、劍桔梗などのやうに劍を花の間に取合せてあるのがそれで、そればかりでなく、兜の鍬形や總角や脛楯や、その他弓矢は勿論、武器に關するものは悉く紋所に用ひられてゐるといつてよいのであります。但し、かういふ武張つた紋所は多く武家に用ひられたので、公家に



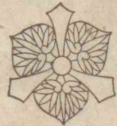
丸の鶴



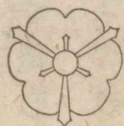
桐七五



梗桔劍



葵劍



草漿酢劍

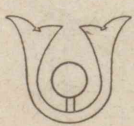
徳富蘇峯 文章家、歴史學者。名は猪一郎、文久三年(一八五三年)肥後國(熊本縣)に生れた。折敷 片木で作つた角盆。食器を載せる具。隅切とは四つの隅を切つたものをいふ。だから八角になる。天草戦争 寛永十四年(一六三七年)切支丹宗徒が天草四郎時貞を擁して肥前國(長崎縣)島原の城に據つて叛き、翌年に平いだ戦争をい

はかやうな紋所を用ひてゐる者が少しもありません。それ故私はこの種類の紋所を尙武的紋章と名づけてをります。これが第一種であります。

第二種は、戦争の際の功名手柄を後世に傳へる爲に作つた紋章で、私はこれを記念的紋章と名づけてをります。例へば、徳富蘇峯氏の紋所を見ますと、八角の中に巴が描かれてあります。八角といふのは、隅切の折敷と言つて神様に供物を上げる時に用ひる物であります。徳富氏のお話に依りますと、氏の御先祖の方が、天草戦争の折に敵の大將の首を取られ、これを首實檢に供する爲に、隅切折



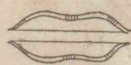
藤



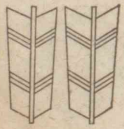
形鍬の兜



角總



弓



矢

擬へ。

敷に載せて大將の見參に供へられた事があつた。これに因んでこの紋所を作られたといふ事で巴は昔から一つ頭二つ頭などと呼んだものでありますから、これを敵將の首に擬へ、折敷に組合せて新しい紋所を組立てたといふことは、いかにも武家にふさはしい話であります。かういふ種類の紋所は他にも澤山あります。例へば關ヶ原の合戦に、土佐の檉井といふ士が敵將の首を取つた記念に、生首を紋所にしたといふ例もありました。源平屋島の戦に那須與一が平家の扇を射落した、その晴れやかな功名をしのぶ爲に、その子孫の中には、日の

屋島
香川縣木田郡。

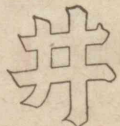
那須與一
名は宗高。



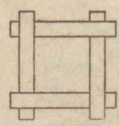
巴一に敷折



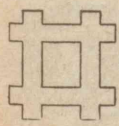
櫻



字の井



檉井



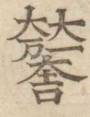
筒井



字の吉



字の利



大香



水菊



若桐

丸の扇を紋所に用ひてゐる者があるといふ事ではありません。

第三種は私が指示的紋章と名づけてゐるもので、概して苗字に因んだものであります。例へば、吉野といふ苗字の者が櫻の花を紋所にし、堀井、酒井、駒井、井伊、澤井などといふ井の字の附く苗字の者が井の字、或は井桁、井筒などを用ひる類で、これ等はその紋所を見て、これが何所の紋所かといふ事がすぐに指示されるやうに作られたものであります。近藤、遠藤、伊藤、佐藤、加藤、工藤、内藤などといふ苗字の家が、比較的多く藤の紋所を用ひてゐるの

コマ井

雲上明覽
天保八年(二四九
七年)刊行、編者
不詳。

文字の方で
は、文字を
用ひたこれ
には、凡て
屬します。

もこの種類に屬します。藤の紋所に就いては藤原氏から出た家が用ひるといふやうな説もありますが、それは全くの誤で雲上明覽といふ書物に據ると藤原氏から出た公家は總計九十七軒あるがその中藤の紋を用ひてゐるものは、わづか七軒だけであるのによつてもわかります。

第四種は瑞祥的紋章とも名づけるべきものであります。これは息災延命福德圓滿子孫繁昌など俗に言ふ縁起のよい事に因んで工夫されたもので、大別すると文字と繪模様との二種になります。文字の方では、指事の意義を離れて、天長、大福、吉利



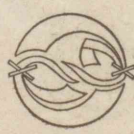
楓



膽龍の家我久



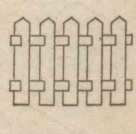
子留久川中



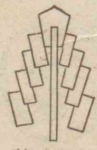
守國賦



居鳥



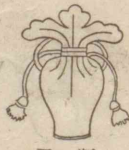
籬瑞



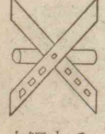
幣御



額



子瓶



木鏗木千

めでたい(目出度)

重陽
九月九日の節供。

などのやうにめでたい文字を用ひたのはすべてこれに屬します。石田氏、山内氏などに用ひられた大い、大万、大吉の六字を寄集めた紋章などはその最適例でありませう。繪模様の方も同じく指事の意義を離れたのが皆これに屬するので、その第一に擧げるべきは畏くも皇室の御紋章の菊花であります。これは花の姿が端生優雅で氣品が高い上に、延命の瑞草として重陽の嘉節に用ひられるのに因んだので、まことに瑞祥中の瑞祥と申すべきものであります。また桐の紋はこの木に靈鳥鳳凰が棲む事に因んだのであり、楠木氏の菊水は、菊の

牙に大じてかへてもうひらられること

下水しみずを掬くんで長壽を保つといふ支那の古傳説に據つたのであります。その他千年の齡ねんにあやかる意で鶴を用ひ萬歳の壽を祝つて龜を用ひるなど、その數の多い事はさすがに縁起を好む人間の心理を現してをります。

さすが(流石)

メキツク

例へば

第五種は尙美的紋章とも名づけるべきもので、これは多く公家の家に用ひられました。公家には家々によつて衣裳や車などの裝飾に代々きまつて用ひられた文様がありました。例へば、花山院家の杜若、今出川家の楓、久我家の龍膽の如きは、いづれも車



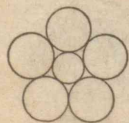
字 有



巴



葉の楓



鉢 梅



字の無

や著物の文様として用ひられたものが、後世紋所が行はれるやうになつてから、その方面に轉用されたものであります。これ等の紋所は、もと單に美しいといふ好みによつて用ひ始められたものでありますから、尙美的紋章ともいふべきもので、これは概して文様から移つて來たものであります。

二二 紋 所 その二

第六種は信仰的紋章とも名づけるべきもので、これには随分澤山の種類があります。例へば、戰國時代にはキリスト教が盛んに行はれたので、この教を信ずる者は、多くクロス

クロス (十字架)

二二 紋 所 その二

一三七

賤ヶ嶽
滋賀縣伊賀郡。
中川清秀
戰國時代の武將。
天正十年(二二四
二年)歿、年四十

島原の亂
天草戦争。

を紋所といたしました。その一例を挙げると有名な賤ヶ嶽の三振太刀の一人中川清秀は、當時の名高いキリスト教信者であつたので、その子孫は今でも「中川クルス」と稱して、パテント・クルスといふものを用ひてをります。備前の岡山、因幡の鳥取、この兩池田侯爵家は祇園守といふ紋所を用ひてをります。これはキリスト教のアンドュー・クルスから出たものであります。御承知のやうに、島原の亂以來、キリスト教は厳しい國禁となつて、これを信ずる者は大名でも、士でも、或は死刑に處せられ、或は家祿を召上げられるといふやうな事になつて、この教に關係のあるものは片端からその影を潜めました。が、それにも拘らず、戰國時代にキリスト教を信

信仰的紋章
の中では比較的
澤山あります

概

セシオン
仙石

じた大名の子孫は大抵クロス系統の紋を用ひてをりました。

信仰的紋章の中では、神様に關係したものが比較的澤山あります。例へば、鳥居、瑞籬欄干、御幣額、瓶子、千木、鯉木など、苟も神社に關係のあるものは概ね紋所に用ひられて、さすがに日本は神の國だと思はれます。これに反して、佛教關係は多くありませんが、これは神道の現世的であるのに反して、佛教が超現世的であるに基づくのであります。仙石子爵の紋所に「無」の字を用ひてあるのは、禪宗の「趙州無字」といふ故事から來たので、少い例の一つであります。

我々の家に紋所があるやうに、神社にもまた社紋といつ

用ひてゐる

キジキ
多電

杵築
今 大社町といふ。

キジキ
杵築

てきまつた紋所を用ひてゐるのがあります。例へば天満宮の梅鉢の紋、諏訪神社の梶の葉の紋、八幡宮の巴の紋、出雲大社の龜甲に「有」の字の紋の如きがそれであり、出雲で「有」の字を用ひるのは、社傳に據ると出雲では祭神の大國主尊が杵築に鎮座せられたのが十月であつたといふので、この月を鎮座月と申してをりますが、十月の二字を組合せると「有」の字になるので、それを神紋に定めたのであると申しま

す。
とにかく、我が國では家にも神社にもきまつた紋章があつて、それに歴史的、精神的の重大な意義があるのでありますから、紋所の研究がその方面の關係學にとつて大切であ

ありませう

日々の禮拜はもとより

るばかりでなく、これに就いて一通りの知識と趣味とを持つ事は、修養のある國民の一種の嗜みとも言ふべきであります。

二二 家

我が國の家は祖先と一緒に住んでゐる家である。神棚や佛壇には祖先の靈が祭つてある。日々の禮拜はもとより、祖先の忌日には必ずこれを祭る。親から子、子から孫と、嫡子たるものが家を繼ぐと同時に、その祭事をも繼いで行くのである。家の主人は家長である。家長は家族を代表し、家族を率ゐて祖先を祭り、また他の家と交際するのである。家族は家

さうして

長の命令を遵奉しなければならぬ。一家の主婦は家長の妻で、他の家から嫁入して来て、家長を助けてその家を處理して行く。さうして、その家の相續者をはじめ子女を養育して行くのである。男子と女子との同棲によつて、夫婦同權の家庭が一代ごとくに生ずるのではない。我が國の家は祖先から引續いての家である。

…附けるもの：
…繼續して行くの
である

同じ名

頼義の子が義家、義家の子が義親、義親の子が爲義、爲義の子が義朝、義朝の子が頼朝といふやうに父祖の偏諱を附けるのも祖先からの家の存在を永久に繼續して行くのである。商家の主人などは、昔は代々同じ名を繼いで、一代目から二代目、三代目と何時まで經つても同じ名で續いて行つた

父子の代こそ代れ

のである。父子の代こそ代れ、家は何時でも同じ家であるから、家長の名までが同じでよいのである。

ふらち(不埒)

それ故家長の名は大切である。若しその家にふらちな者があつて、世人に爪弾きされるやうな事があれば、その家の名折れである。その家名を汚すものである。國語では親も先祖も同じくオヤと訓じて、遠祖をばトホツオヤと言ふが、家名を汚す事は、つまりオヤ、トホツオヤの名までも汚す事になる。何人も父があり母があつて、家の人でない人はない。家の人たる以上は家の名を重んじて、決してこれを汚してはならぬ。その家の名を揚げ、その家の名譽を高からしめるのが、オヤに對し、トホツオヤに對しての孝行である。まして家

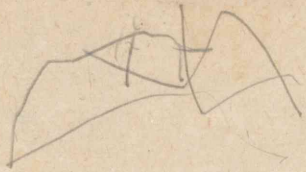
高からしめる

あつては

を潰すやうな事があつては不孝この上ない事である。故に苟も家名に關する大事であれば、寧ろ自己を犠牲にしても厭はないといふのが古來の風習である。家は自己より大きく、自己よりも大切である。自己の名を棄てても家の名を全うしなければならぬといふ觀念である。

それ故昔は、家長たる者はその家族に向つて絶對的權利をもつてをつた。その家族中に家の名を汚すやうな者があれば、直ちに勘當する事が出來た。廢嫡する事も出來た。他家から嫁入した女は、もとよりその夫の家の習慣を守らねばならぬ。それ故家風に合はぬといふ事が離婚即ちその家から出される理由ともなつた。家を繼ぐべき嫡子は家の跡取

全うしなければ



尊まれた

として、他の子女よりも尊まれた。兄をコノカミと言ふのは子の上の義である。次男以下は別家をするか、他家へ養子に行つて他家を相續するか、どちらかであつたのである。今でも子のない家では血縁の續いた者を迎へて養子とし、また女子のみのある家では、他の家から男子を迎へて祖先の家を繼がせるのである。

今日の民法は時世の變遷に鑑み、過去の弊害のあるところをも認め、法理上の理由から制定されたもので、個人としての權利も大いに認めてあるが、家を本位とする慣習も十分に保存されてゐる。廢嫡、離婚等を直ちに家長の權能として委ねてはないが、裁判所の判決を待つて出來るやうにな

負ふべきもの

扶養するの義務は

なくして

つてゐる。嫡子は家長の死亡と共にその家を相續して家長となり、その遺産を受け、祖先の墳墓を守る事となるのである。それで親の債務は當然嫡子の負ふべきものである。父母を扶養するの義務は子として必ず負はねばならぬ。個人本位ではなくして、どこまでも家族本位である。

忌服の制のある事も家族本位の特色である。これは民法に規定してあるのではないが、古來の習慣によつて行はれてゐる。我等はその習慣に従はなければならぬ。

五本の指の一番大きいのを親指と言ひ、扇の骨の一番太いのを親骨と言ふ。小船に對して大船を親船と言つたのも古い語である。これ等は物の名に宛てたのに過ぎないが、團

言ふが如き

衆の中で頭株の者を親方、親分と言ひ、その下の者同士を兄弟分と言ふが如きは、家族本位が社會上の組織に影響した一例である。

自慊文

我が國の家庭

小さい兄や姉や弟や妹を背負つて路端に遊んでゐるのは、我が國では何所へ行つても見受ける事であるが、西洋では決して見られない。それを始めて見た或外國人が、

國風
國のなほはし。國
家の風習。

「何といふかはいらしい様子であらう。こゝに日本の美しい國風が見える。」

と言つて感心したさうである。素直に親の言附を守るのは、日本の子供の美德である。兄や姉が自分よりも小さい弟や妹をかは

美德
うつくしい道德。

一端
かたはし。

東西
東洋と西洋、即ち
世界中の意。

七夜
子が生れてから七
日目。

因む
よる、かたどる。
命名する
名をつける。

七五三の祝
男子の三歳と五歳
女子の三歳と七歳
との年の十一月十
五日に行ふ祝。

袴著
男子が五歳または
七歳の時始めて袴
を着ける時の儀式。

帯の祝
女子が三歳、五歳
または七歳の時始
めて帯を着ける時
の式。

端午
五節供の一。陰曆
五月五日男兒の立
身出世を祝つて幟
または青などを飾
る。
傾ける
十分によるこびを
つくす。

いがつて世話をするのも、日本の子供の美德である。世話になつた弟や妹が、兄や姉を大切にするのも、日本の家庭の特色である。この西洋人は、くはしくは我が國の家庭の内、部を知らなかつたのであらうが、路端の子供を見て、我が家庭の美德、父母ニ孝、兄弟ニ友の一端を認め得たのである。

父母の子を愛する情は東西共に變りのあるはずはないが、日本の家庭では殊に子供を大切にす。家の貧富貴賤によつて、生活の上にはそれ／＼の差別があつても、一體の風習は子供を大切にす。

子供は父母の寶といふのみでなく、家の寶として尊重される。子が生れた時の父母の心は家の後繼が出来たのを喜び、家の益、繁昌して行くのを祝ふのである。親族も朋友も皆同じ心で祝賀するのである。七夜までのうちに名を附ける、行末はりつばな人

になつて御國の爲にもなれと、祖先の名に因んだり、めでたい話などを選んで命名する。三十三日目には、産土神にお宮参をして、誕生した事をお知らせする。三つ、五つ、七つとだん／＼成長すれば、七五三の祝と言つて、その年々の十一月にお宮に参詣する風習もある。男の子の袴著の祝、女の子の帯の祝、父母はひたすらその子の成長を楽しむのである。

三月三日の雛祭は女の子の節供、五月五日の端午は男の子の節供、一家中の歡喜は子供等の爲に傾けられる。美しい雛人形、勇ましい



七五三の祝

知友
ち。知りあひやともだち。

老を慰める
自分の年よつたのを忘れてよること。

系圖
祖先からのつゞきを書いたもの。

別家
或家族から分れて獨立した家庭。分家ともいふ。

鯉のぼり、かういふ楽しい日は年々に繰返されるのである。盆やお歳暮の贈物にも、父母は子供等を喜ばせようと苦心し、親類知友からも、お子様へと心を籠めた品物を贈る。我が國の都市程おもちや屋の多い所はないといふのも、小さい國民をかはいがる國風の盛んな事を證明するのである。

我が國の家庭には、お父さんも、お母さんも、お祖父さんも、お祖母さんもいらつしやる。日本の子供は父母の慈愛の外に、祖父や祖母の愛をも受ける。祖父や祖母は孫をいつくしんで老を慰める。

家の中には神棚があり、佛壇があつて、先祖の位牌を祀つてある。我が國の家は先祖からの家で、先祖と一緒に住んでをつて、だんだんと子孫に傳はつて行くのである。家には家の系圖もあり、先祖から傳はつた品物もある。新しい家や別家した家には、さう

いふ物のない所もあるが、本家にさかのぼり、源を正せば皆それがある。

家には家の紋もある。

ちゝはゝはわが家の神わが神と

心つくしていつけ人の子

と本居宣長大人は歌はれた。

父母は子等を家の寶と思ひ、子等は父母を家の神とあがめるのが、我が國古來の道である。親の親の世から傳へて來た道である。親しい懐かしい親愛の情に、貴いありがたい敬愛の情が湧いて、父母に對しては神に對するやうなつゝましまやかな心持になるのである。

それ故、言語動作にもそれが表れて來る。外國の家庭では親子、夫婦、兄弟、姉妹の間の言葉遣はすべて對等であるが、家の神と仕

我が國の家庭(自修文)

本居宣長
江戸時代中期の國學者。鈴屋と號した。伊勢松阪の人。享和元年(二四六二年)歿。年七十六。

大人
學徳の高い人をたつとんでいふ稱。あがめる。たつとぶ。

對等
上下なく同等であること。

先祖と同居
家の内には神棚な
り佛壇なりがある
のでいふ。

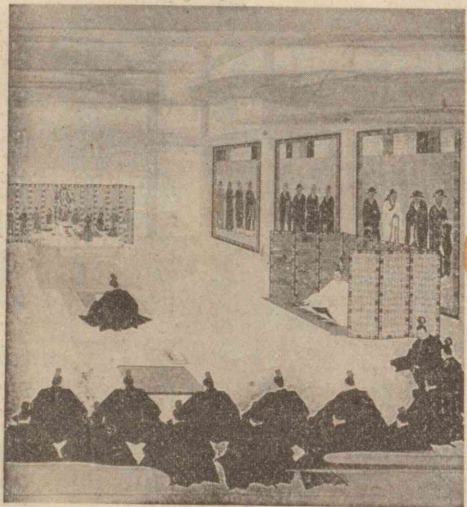
へ奉る父母に對しての言語は、もとより別でなければならぬ。先祖と同居してゐる我が國の家庭では、目上に對する言語と、目下に對する言語とに明らかな差別がある。親代りに世話をし、いたはつて下さる兄弟に對しても、敬語を使はなければならぬ。兄弟はあくまで幼少な弟妹を憐み、弟妹はどこまでも兄弟を目上の人とあがめ、兄弟仲よくして父母に仕へ、父母の心を慰めて、こゝに美しい家庭が成立つのである。父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和する家庭が存立するのである。

西洋人は「日本は子供の樂園である。」と言つてゐる。日本は子供をかはいがる國である。」と西洋の讀本にも書いてある。我等がこの國に生れたのは、我等の幸である。

徳富蘇峯
評論家、歴史學者、
貴族院議員。東京
日々新聞社社長。
は猪一郎。文久三
年（一五二三年）肥
後國（熊本縣）に生
れた。

二三 五箇條御誓文

徳富蘇峯



（筆陽南乾）文誓御條箇五

五箇條御誓文は、これ維新の大改革の宣言書である。日本帝國の維新時代に於ける第一聲である。過去に於ける三千年の歴史を一括し、將來に於ける幾千載の國是を指定したる帝國不磨の寶典である。その起草者の何人であるかを吟味する必要は毫もない。何となれば、これは一人一個の意見になつたものではなく、實に時代の一大志望、舉國の一大渴仰を、明治天皇の

誓はせ給ひし給うたもの

紫宸殿
京都皇宮の正殿。
朝廷の儀式を行は
せ給ふ所。
率ゐて

御名もて神明に誓はせ給ひ、天下に示し給うたものであるからだ。

抑、五箇條御誓文は、維新の詔書と同時になつたものであつて、實に明治元年三月十四日、明治天皇紫宸殿に御し、群臣を率ゐて祖宗の神靈に誓ひ、これを中外に宣し給うたものである。

一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ

これが明治二十二年、帝國憲法によつて、帝國議會を開設し給うた根元である。而してこの會議を起し、衆に諮るは、我が上代歴史に示す如く、祖宗以來の慣行である。

一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸を行フヘシ

而して...衆に諮るは...慣に行...
行 諮るは...衆に
で あるは...慣に

これは舉國一致、以て國運を進捗せしめ、帝國の世界に對する天職を遂行する事を意味したものである。

一、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マ

サラシメンコトヲ要ス

この一條中の主眼は、其志ヲ遂ケにある。その志を遂ぐる事は、國民の志望を遺憾なく發揮せしむる事を意味する。それたゞその志望を發揮し、日に就り、月に將む。故に自ら倦むところを知らず。

一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ

これが維新大改革の中樞點である。長き歴史ある國民は、やゝもすればその歴史にかゝはり囚はれて、その歴史の最

囚はれて

も不必要な部分、最も有害の部分、即ち過去の糟粕とか、塵垢とかいふ部分に執著するものである。故に肇國の大精神に顧みてこれを一洗する必要を生ずる。いかなる家に於ても、一年に一回、乃至兩回の大掃除は必須である。況や國に於てをや。また、況やその國數百年鎖國の状態に停滯したるに於てをや。

こゝに天地の公道と特書せられたるは、單に一國一州の舊例、故慣を株守せず、進んで世界共通、人類總體の奉じて以て公道となすところを、正視闊歩すべきを示し給うたもの。一、智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ
讀んで字の如し。殊更吾人の説明を要しない。

我國未曾有ノ變革ヲ爲ントシ朕躬ヲ以テ衆ニ先ンシ
天地神明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ萬民保全ノ道ヲ立
ントス衆亦此旨趣ニ基キ協心努力セヨ
いかにもありがたき思召である。この五箇條御誓文は、實に帝國の向ふところ、國民の趨くところを指點したる羅針盤であり、燈明臺であり、案内標である。吾人が維新の大精神に立返れといふのは、とりも直さずこの五箇條御誓文に立返れといふのである。

(國民小訓)

二四 鳴く蟲の話

夏、湯上がりの縁先に、冷風と共に夕闇が忍び寄る頃、静か

吾人が立返るの
れはとていふので
ある

に奏でる蟲の音は、暑熱と勞働との後で味はひ得る夏の夜のこの上ない慰安であり、喜悅であります。

旅の宿りに、閑居の邊に、一家を擧げてのだんらんの食卓に、打水をすませた庭の隅に、或はまた釣瓶垂れた井戸の傍に、並木の下に、我々は到る所に鳴く蟲の悲哀に接し、歡喜に耳そばだて、清淨さに心打たれるのです。

鳴く蟲の音、それは夏のもので、汗を流す晝間の續く限り、夜のもので、

夏の夜のそゞろ歩きに、縁日の灯をくゞれば、きつと其所で市松格子の屋臺に、美しい蟲籠を並べた假小屋から、さまざまの蟲の聲がさゞなみのやうに流れ出て、我々の足をと

我々には到る
すた所は心の打
れたるで

さゞなみ(小波、
漣)

どめずにはおきません。

なぜこのやうに鳴く蟲が、特に我々日本人を引附けるのでせうか。これは一面に於ては、日本人の性情を語ると共に、我々の祖先の優しい、そして素直な自然愛護の精神を證據立てるものであると言はれてをります。さうです、確かに我の祖先は他のいづれの民族にもまして、自然の愛好家でありました。自然の差伸べた腕にしつかと抱かれて、その胸に耳をあてて、限らない詩情を湧かしたものである事は、文書の明らかに物語つてゐるところです。しかも、日本人はその樂天的である半面に、哀愁を解して、これに遣瀨ない愛著を感じずるものです。更にまた小さいものをいとしむ心の強

引附けるのでせう
か

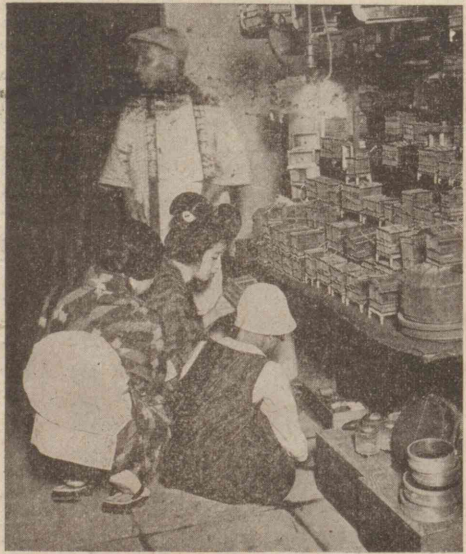
いものです。蟲の音が降る程に聞えて、秋の夜長を賑はせ、或は悲しませます。たゞ静かにく憩を取りたい、そんな氣持の時には、絃樂も、管樂も鳴く蟲のたぎ々たる音樂には敵すべくもありません。

外國人ではあるが、歸化人となつて日本人の心に觸れたラフカディオ・ハーンは、その著「昆蟲音樂師」の中に、「日本を訪問する者は、少くとも一箇所は必ず縁日をのぞいて見なければならぬ。縁日では、夜無數のランプや提燈のは火影かげに映つて、あらゆるものが皆美しく見える。この經驗を経なければ、日本は到底わかるものではない。日本人の日常生活に現れる美と怪奇との、不思議な融合、奇妙と可憐との魅力がわか

ラフカディオ・ハーン
英文學者。イギリス人であつたが我が國に歸化した。小泉八雲と稱した。明治三十八年（一九二五）五月十六日歿。年五十六。

日本人の融合は、魅力がわからない。

るものではない。其所ではいろくの面白いものに觸れるけれども、その中でも最も注目すべきものは、小さな木製の籠を澤山備へてゐて、幻燈のやうに光り輝いてゐる小屋掛である。その小屋掛は、歌ふ蟲を商ふ商人の小屋掛で、其所から鳴く蟲の優しい嵐が流れ出るのである。それは奇妙な觀物で、外國人は殆ど何時もこれに引附けられる。といつたやうな意味の事を書いてゐます。



賣 蟲

籠りに放つた
り：に放つた
で：音しをて
す ゐをて
た賞翫の
の

夜を籠めて可憐な音楽を奏でるこれ等の鳴く蟲は一體何時頃から我々の祖先を慰めてゐたでせうか。鳴く蟲に關する最初の記録は平安時代の物語に現れてをります。その頃から既に鳴く蟲は其所此所の野邊の草葉の宿に鳴いてみました。高雅な性情と趣味とをもつた宮人たちはこれを捕へて籠に入れたり、部屋の前庭に放つたりして、その音を賞翫してゐたのです。その蟲が何であつたかは明らかではありませんが、松蟲と鈴蟲とだけは知られておりました。しかし、松蟲はりん／＼と鳴き、鈴蟲はちんちろりん／＼と歌ふものであるといふやうに、ちやうど今と正反對に考へられてゐたのです。更にまた、その當時の和歌を見ると、松蟲は鈴蟲

に比して遙かに澤山詠みこまれてゐますが、これは松蟲のまつが、何々を待つまつにかゝるといつた言葉のあやから、大した考もなく、鈴蟲まで、松蟲のやうに歌つたのだらうと思はれます。

(東京朝日新聞)

二五 美しき國民性

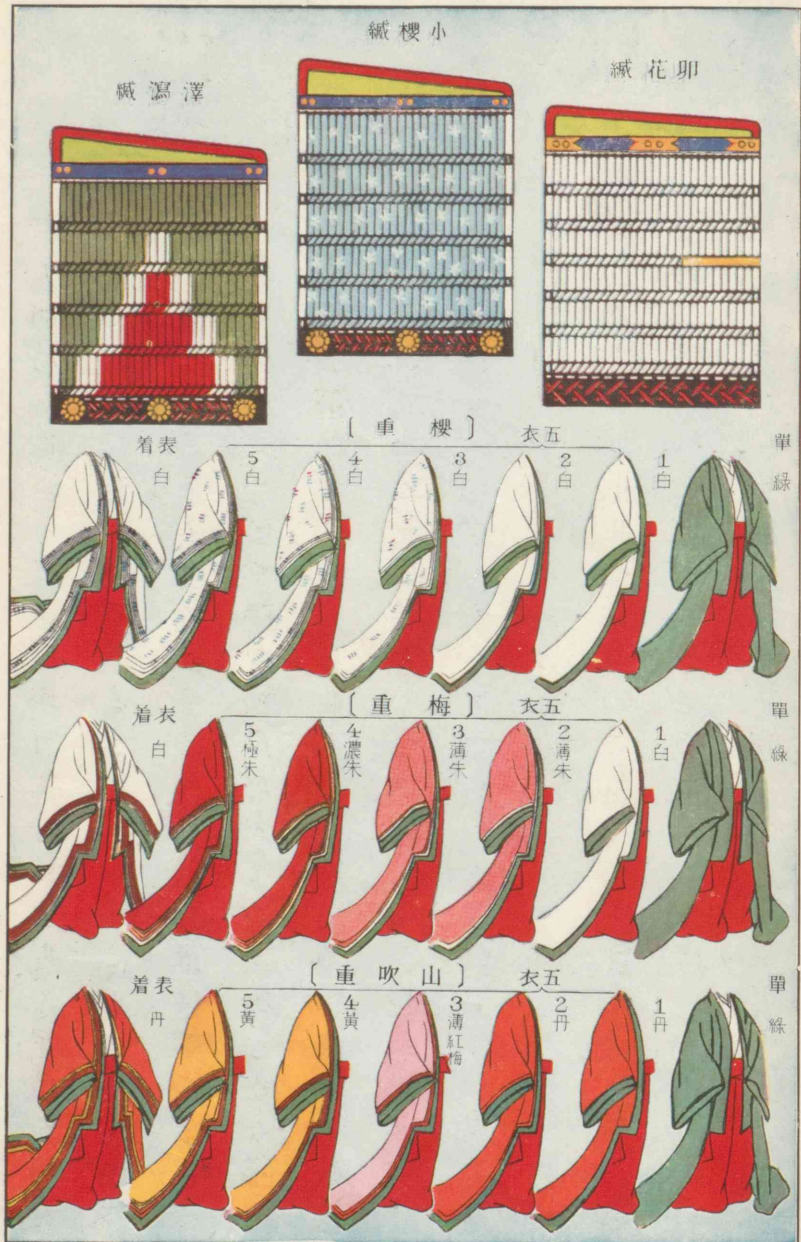
氣候は溫和である。山川は秀麗である。花紅葉四季をりりの風景はまことに美しい。かういふ國土の住民が現生活に執著するのは自然である。現世を愛し人生生活を樂しむ國民が、天地山川を愛し、自然にあこがれるのも當然である。日本の娘の著物の模様のはでやかなのは西洋人の著書

しのぶのすり衣
陸奥國(福島縣)
信夫郡にある石の
面に絹布をあてて
石のきめをすり出
したものを後世は
しのぶ草ですり染
する。

ぶだう(葡萄)

をどし(絨)
おもだか(澤瀉)

にも何時も歎賞してあるが、日本の秋の野の景色を見れば、尙更これよりも綺麗である。自然に衣服にもこれが染つて来る。昔のしのぶのすり衣、今の振袖模様、裾模様、つまりは同じ事である。菊や、櫻や、梅や、牡丹を大きく染出した友禪縮緬や、縹珍の帯から下駄の鼻緒の先まで、自然界の草木花模様で飾られてある。その色合の名稱でも、櫻色、桃色、山吹色、栗色、ぶだう色など、植物界から取つた名が多い。昔の女装束は櫻重、梅重、山吹重など、重ねの色合は常に四季をりくゝの花に因んであつた。裾には大海の景色を描き、腰には唐草を縫つてある。優しい女流の装束は當然とも言はうが、武士の戦争にいでたつ甲冑装束にも、小櫻をどし、卯の花をどし、おもだ



それであるから

吹く風を云々

「吹く風を勿來の關と思へども道もせに散る山櫻かな」
(千載集、源義家)
行暮れて云々
「行暮れて木の下
かけを宿とせば花
や今宵のあるじな
らまし」(平忠度、
平家物語)

かしは(榭、柏)

かをどしなど、いかにも優美ではないか。總じて我が國の鎧甲冑は、當時の平服のはでやかなのに似合つて、いかにも美しいものであつた。それであるから「吹く風を勿來の關」と歌ひ「行暮れて木の下かけを」と歌つても、よく似合ふのである。西洋の蝦甲冑では似合ふものではない。

更に我等の日常がいかに植物及び自然界に關係を有するかを、食物の方面に見れば、春秋の彼岸の牡丹餅、お萩の名を第一として、菓子屋の目錄を一見して、一層その多い事がわかる。松風、紅梅焼、磯松、桃山などの一般名稱は言ふまでもなく、櫻餅、鶯餅、かしは餅の外、自然界の現象に取つたものでも、洲濱、時雨、越の雪、落雁、しほがま、さゞれ石などの類がある。

名稱ばかりではない、形も花木に取るのが多い。

干菓子には別して松の葉や、菊の花、すべて花木の形に作るのである。

茶

汁粉なども十二月に分けて、そのれぞれの雅名を付けてゐる所もある。

湯

また下戸の領分ばかりでなく、酒にも櫻正宗がある。菊正宗がある。山川の白酒がある。蓬萊の島臺



用ひられるが

は今も儀式の時に用ひられるが、魚類の料理もまた植物界

すし(鮓、鮓)

自然界とは離れぬ。刺身やすしには笹の葉を敷く。牡丹餅や赤飯を配るのに重箱に南天の葉を敷く。これは毒を消すとかいふまじなひから來たものでもあらうが、かしはでの名残もあらう。

まじなひ(呪禁)

ヨーロッパ(歐羅巴)

料理の膳椀は金蒔繪で花木の形を裝飾とする。漆器陶器一切の美術工藝品が草木花鳥の繪である事は、もとより言ふまでもない。それは裝飾美術として、近世のヨーロッパの美術に少からぬ影響を與へたものである。

なつめ(棗)
さじ(匙)

茶の湯のなつめなどは當然としても、俗に陶製のさじを蓮華と言ふなども優美である。

插花の術、箱庭作り、盆景の山水、皆我が國人獨得の技倆で

見たら
感ずる

花を活ける

あつて、獨得の發達をしてゐる。
繪畫では生きくとした花木の色、禽鳥の飛動してゐる
さまなど、西洋の靜物に馴れた目から見たら、珍しく感ずる
に違ない。

すべて花を活けるにも、それを描くにも、その生きたまゝ
に、自然のまゝにするのが美しい點である。枝からむしり取
つて花ばかり挿しこむのは西洋の花瓶であるが、自然の枝
振をそのまゝに、天地の配合よろしく表すのが、活花でも、盆
裁でも日本人の長所である。

日本人は眞に自然の友である。よく自然の心を解した者
である。

源頼政
武人で歌を善くし
た。平氏を滅ぼさう
として兵を擧げ、
敗れて宇治で自殺
した。時に治承四年
(一一八四年)。
辭世の歌「うもれ
木の花さくことも
なかりしにみのな
るはてぞ悲しかり
ける」(平家物語)
太田道灌
名は持資。戰國時
代の武將。文明十
八年(一四八六年)
歿。年五十五。
み一つだに云々
一七重八重花は咲
けども山吹のみ
しき一後拾遺集
兼明親王

四季の風光は一日も我が國民の頭から離れた事はない。
この四季の景色と人事とを結び附けて感ずる事は、即ちあ
はれを知るのである。源義家や源頼政や、平忠度が、いかにも
日本武士として優に優しく感じられるのは、このあはれを
知つたといふ事があるからである。太田道灌に關する、みの
一つだになきぞ悲しきの話は、史實ではなくして傳説であ
らうが、歌を好んだ武士であるから、あゝいふ傳説が附いた
のである。頼朝も、尊氏も、秀吉も暇のある時は風流の技をも
てあそんだのである。風流といふ事、詩的といふ事の意味は
自然に向つてのあこがれが、その大半を形作つてゐるので
ある。日本の武士道は西洋の騎士道の如く婦人を崇拜せぬ

恐らくは……ある
まい

代りに、自然の花を愛し、ものあはれを解したのである。

英雄豪傑ばかりではない、日本人程國民全體が詩人的な

のは、恐らくは世界中にあるまい。歌

心は誰にでもある。今日日本で歌を

芳 作る人はどのくらゐの數であらう。

賀 宮内省への毎年の詠進は何萬とい

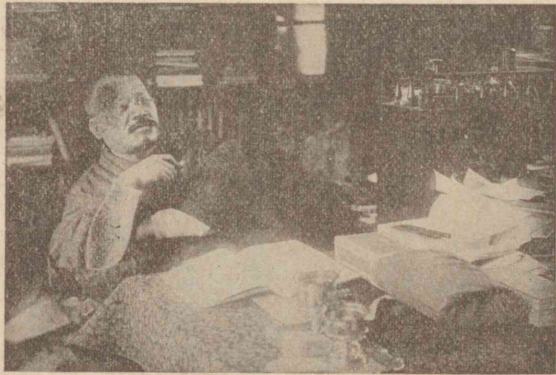
矢 ふ數である。歌を作らないでも俳句

一 を作る。どんな片田舎にも俳句の宗

匠はゐる。神社奉納の額面は到る所

に小詩人の名を列ねてゐる。短くて

作り易い短詩形であるから、上手でこそなけれ、何人も作つ



上手でこそなけれ

盆栽いぢり

罪なくして云々
源顯基のこと。永
承二年(一七〇七
年)歿、年四十八。

て、花見、遊山の時にも一興とするのである。この花見といひ、
雪見といひ、月見といひ、春は花、秋は紅葉、小詩人はまことに
忙しいのである。悪事をはたらいて死刑に處せられる大悪
人でも、死に臨んでは一首を口ずさむといふやうなのは、恐
らくは他國にはない事であらう。我が國民は全國民を擧げ
て抒情詩人である。敘景詩人であると言つてもよいのであ
る。

それ故我が國民は、隱居すれば盆栽いぢりをする。歌や挿
花に慰安を求める。昔は罪なくして配所の月を見たいと言
ふ人もあつたが、日本人が世の中を厭ふと言へば、風流三昧
に日を送る。西洋で言ふ厭世は、ほんたうにこの世の中が厭

西行法師 鎌倉時代初期の歌僧。俗名は佐藤義清。建久元年(一一七三)寂。年七十三。

鴨長明 後鳥羽上皇に召され和歌所に仕した。北野山に入つて方丈記を著した。

深草の元政 見聞は今京都市伏見区。江戸時代初期の高僧。歌。文茶道を善くした。寛文八年(一七二八)寂。年四十六。

太田垣蓮月 京都の人。名は誠。愛兒及び失を失ひ尼となつた。和歌を善くした。明治八年(一八七五)寂。年八十五。

になるのである。自殺するより外に方法がない。日本人の厭世は人事社會がうるさいのである。人事社會から遠ざかつて花鳥風月に近附けば、それで厭な思はなくなるのである。西行法師が世を遁れたと言つても、一生行脚して花月を楽しんでゐた。鴨長明も頻りに世の中をあぢきなく思つたが、庵室にはいつて自然を楽しんで満足してゐた。その他深草の元政上人でも、近い頃の太田垣蓮月でも、世の中に立交るのは厭でも、自然といふ樂地は別にあつたのである。

女子新國文 改制新版 卷一 終

常用漢字

(大正十二年五月臨時國語調査會發表、昭和六年五月修正)(千八百五十八字)

【一】一丁七丈三上下不
世丙並【一】中【一】丸主
【一】之久乏乘【乙】乙九
乞也乳亂【一】了事【三】
二五五井【一】亡交京亭
亦【人】人仁仇今介仕他
付代令以仰仲伴任伊伏
伐休伯伴伺似位低住佐
何余佛作伸使來佳例侍
供依侮侯便係促俱俊
俗保俠信修俳俵倅併倉
個倍倒候借倫假偉偏停
健側偶傍傑備催働傳債
傷傾僅像僚僞僧價儀億

儉價優【几】元兄充兆兎
先光克免免兒【入】入内
全兩【八】八公六共兵具
其典兼【口】冊再【一】元
【一】冬冷涼准凌凍【几】
凡【口】凶出【刀】刀双分
切刊刑列初判別利到制
刷券刺刻則削前剛副剩
割創劇劍劑【力】力功加
劣助努効勅勇勉動勘務
勝勞募勢動勸勵【一】
包【匕】化北【一】區【十】
十千升午半卑卒卓協南
博【卜】占【尸】印危却卯

卷即【一】厄厘厚原厥
【一】去參【又】及友反叔
取受【口】口古句叫召可
史右司各合吉同名后吏
吐向君吟否含呈吸吹告
咸周味呼命和咽哀品員
哲唐唯唱商問啓善喉喜
喪喫單嗣嘉器噴嚴囑
【一】囚四回因困固國團
園圓圖團【土】土在地坂
均坊坑坪垂型埋域域執
培基堀堂堅堤堪報場塔
塗塵境墓塀增墨墮壁壇
壓壤壤【土】土壯壹壽【又】

夏【夕】夕外多夜夢【大】
大天太夫央失奇奉奏契
奔奢與奪獎奮【女】女奴
好如妃妊安妙妨妹妻姉
始姑姓委姦姪姪姻姿威
娘娛娠媚婚婦婿媒嫁嫡
嫌嬢【子】子字存孝季孤
孫學【一】宅守安宏完宗
官定宜客宜室宮害宴家
容宿寄密富寒察寢寢實審
寫寬寶【寸】寸寺封射將
專尉尊尋對導【小】小少
尙【尤】就【尸】尺尼尾尿
局居屆屈屋展展履履屬

【山】山岡岩岳岸峙峯島
【川】川州巡巢
【工】工左巧巨差【己】己
【巾】市布帆希帝帥師席
帳帶常幅幕幣【干】干
【幻】幻幼幾【床】床
床序底店府度座庫庭庶
康廉廊廢廣廳【延】延廷
建廻【弄】弄弊【弋】弋式
【弓】弓弔引弟弱張強彈
【影】影彰【役】役
彼往征待律後徐徑徒得
從御復徵德徹【心】心
必忌忍志忘忙忠快念怒
思怠急性怨怪怯恐恥恨
恩恭息悔悟悖患悲惟悼

情感惜惠惡情惱想愁愉
意愚愛感慈態慕慘慢慎
慣慨慮慰慶慾愛憐憚憲
憶憾憤懇應懲懷懸戀
【戔】戔戎戰戲戴【戶】戶
戶戾房所扇【手】手才打
扱扶批承技抑投抗折抱
抵押披抽拂拍拒拓拔拘
拙招拜括拳拾持指振捕
捧描捨掃授掌排掛採探
控推揚接提換握揮搦搦
援損搖搜擄携摩撫擇擊
操擔據擬攢攝【支】支
【支】收改攻放政故敘教
敏救敗敢散敬敵數整
【文】文【斗】斗料斜【斤】斤

斤斤斬新斷斯【方】方施
旋族族旗【无】既【日】日
且旨早旬旭昇昌明易昔
星春昭昨是映時晚晝普
景晴晶智暇暖暗晷暮暴
曆曇曜【目】目曲更書曹會
替最會【月】月有朋服朕
朗望朝期【木】木未末本
札朱机朽杉棧村束柿杯
東松板枕林枚果枝枯架
柄某染柔查樞柱柳栗校
株根格栽桃案桐桑梅條
梨械乘棋樁棟森栢植楠
業極榮構概樂樓標樞模
樣樹橋機橫檄檢櫻欄權
【欠】欠欲款欺歌歎歌歎

【止】止正此步武歲歷歸
【死】死殊殉殖殘【段】段
殺殿毀【母】母每毒【比】比
【毛】毛【氏】氏民【氣】氣
【水】水水永汁求汗汚
江池決汽沈沒沖沙汰河
沸油治沼沿況泉泊法波
泣泥注泰泳洋洗津洪活
派流浦浪浮浴海浸消涉
液淑淚淡淨淫深混清淺
添減淵渡測港渴湖湧
湯源準溢溶溺滅滋滑滯
滴滿漁漂漆漏演漕濃漢
漫漸潔潛潮澤激濁濃濕
濟濱瀧灣【火】火灰災炊
炎炭烈無然煉煮煙照煩

熟熱燃燈燒營爆爐【爪】爪
瓜爭爲爵【父】父【爻】兩
【片】片版牌【牙】牙【牛】牛
牛牧物牲特犧【犬】犬犯
狀狂狩狹猛猫猶獄獨獲
獵獸獸【亥】亥率【玉】玉
王玩珍珠班現球理琴環
璽【瓦】瓦瓶【甘】甘
甚【生】生產甥【用】用
【田】田由甲申男町界畏
烟畜畝略番畫異畱當壘
【疋】疋疎疑【疋】疫疲疾
病症痘痛痢療癖【登】登
發【白】白百的皆皇【皮】皮
皮【皿】皿盆益盛盜盟盞
盞盤【目】目盲直相省眉

看真眠眼着睡督【矢】矢
知短【石】石砂砲破研硬
硯碁碎碑確磁磨礎【示】示
示社祈祕祖祝神票祭禁
禍福禦禮【禾】禾秀私秋科
秒租秩移稅程稚種稱稻
稿穀積穗穩【穴】穴究空
突窈窕窗窳【立】立章童
端競【竹】竹竿笑笛符第
筆等筋筒答策算管箱節
範築篤簡簿籍【米】米粉
粒粘粗粹精糲糞【糸】系
紀約紅紋納純紙級紛素
紡索紫累細紳紹紺維組
結絕絡給統絲絹經絲維
綱網綴綻綿緊緒線絲緣

編綬緯練縛縣縫縮縱總
績繁織繕繪繭線繼績
【金】缺【网】罪置署罰罵
罷羅【羊】羊美羣義【羽】羽
羽翁翬習翼【老】老考者
【而】耐【耒】耒耕【耳】耳聖
聞聯聲職聽【聿】聿肅肇
【肉】肉肖肝股肥肩育肺
胃背胎胞胸胸能脅脈脊
脚脫腐腕腦腰腸腹膚膜
膝膽臆膺臍【臣】臣臥臨
【自】自臭【至】至致臺
【目】與興舉舊【舌】舌舍
【舛】舛【舟】舟航般舵舶
船艦【良】良【色】色【艸】艸
芝花芽芳苑苗若苦英茂

茶草荒苻荏菊菌菓菜華
萬落葉著蕤蒙蒸蕃葛薄
藏藝藤藥【虎】虎虐處虛
號【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲
蠶蠶【血】血衆【行】行術
街衝衡衛【衣】衣表袞袋
袖被裁裂裏裕補裝裸製
複褒襲【西】西要覆【見】見
見規視親覺覽觀【角】角
解觸【言】言訂計討訓託
記訟訪設許訴診詐詔評
詞詠試詩詰話詳誇誌認
誓誣誘語誠誤說課調談
請論論諸諾謀調諮講謝
諛謹謬證識譜警譯議護
譽讚變讓【谷】谷【豆】豆

豐〔豕〕豚象豪豫〔貝〕貝
貞負財貧貨販貫責貯貳
貴買貨費賀賀賄賂賂
賓賜賞賢賈賤賦賈賈賈
贈贊〔赤〕赤〔走〕走赴起
超越越〔足〕足距跡路踊
躍〔身〕身〔車〕車軌軍軒
軟軸較載輕輩輪輯輪輿
轉〔辛〕辛辨辭辯〔辰〕辰
農〔毛〕込迎近返迫迭迭
迷迨退迭迭透逐途通

速造連週進逸遂遇遊運
過道達達遙遞遠遠適遭
遷遷選選避避還邊邊〔邑〕
邦邗邗郊邗邗郡部郵都鄉
醜醫〔采〕釋〔里〕里重野
量〔金〕金釜針鈞鈍鈔鉛
鉢銀鉢銅銘銳鋒銅錯錄
錢鍋鎮鎮鏡鑄鑄鐘鐵鑑鑄
〔長〕長〔門〕門閉閉閉閉
關閉關〔阜〕防附閉閉閉

院陣除陪陳陰陵陶陷陸
陽隆隊階隔隙際障隣隨
險隱〔隹〕隹雀雄雅集雇
雌雙雜離離〔雨〕雨雪雲
零雷電需震霜霧露靈
〔青〕青靜〔非〕非〔面〕面
〔革〕革靴〔音〕音響〔頁〕頁
頂項順順預預頌頌頌頌
額額額額額額額〔風〕風
〔飛〕飛翻〔食〕食飢飲飯
飾養餓餘餅館餐〔首〕首

〔香〕香〔馬〕馬馳駁駁駐
騎騰驪驅驗駑駟〔骨〕骨
髓體〔高〕高〔高〕高〔門〕門
關〔鬼〕鬼魂魔〔魚〕魚鮮
鯉鯛〔鳥〕鳥鳩鳴鶴鷄
〔鹵〕鹽〔鹿〕鹿麗〔麥〕麥
〔麻〕麻〔黃〕黃〔黑〕黑默
點黨〔鼓〕鼓〔鼻〕鼻〔齊〕齊
齋〔齒〕齒齡〔龍〕龍〔龜〕龜

注意

(一) 本表にない漢字は假名で書くこと (二) 固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、ただし外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること (三) 代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと (四) 外來語は假名で書くこと

昭和十二年十二月二十四日訂正
昭和十一年十一月二十五日訂正
昭和十年十一月二十五日訂正
昭和九年十一月二十五日訂正
昭和八年十一月二十五日訂正
昭和七年十一月二十五日訂正
昭和六年十一月二十五日訂正
昭和五年十一月二十五日訂正
昭和四年十一月二十五日訂正
昭和三年十一月二十五日訂正
昭和二年十一月二十五日訂正
昭和元年十一月二十五日訂正

女子新國文改新版
定價 一卷金六拾錢



編者 芳賀矢一
訂補者 橋本進吉
發行者 東京市神田區神保町一丁目三番地 合資會社 富山房
代表者 同所富山房社長 坂本嘉治馬
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 大日本印刷株式會社

發行所 (明治二十九年六月設立)

東京市神田區神保町一丁目三番地
合資會社 富山房

寺田文子

電話 神田代表 三三二一
大坂 振替口座 東京五〇一三番



三組

子
田
文子

